

「音楽」指導の手引き

2011年 第1回試験

「音楽」指導の手引き

2011年 第1回試験

ディプロマプログラム (DP)

「音楽」指導の手引き

2009年2月発行、2014年11月改訂の英文原本 *Music guide* の日本語版
2016年2月発行

本資料の翻訳・刊行にあたり、
文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

注： 本資料に記載されている内容は、英文原本の発行時の情報に基づいています。ただし、ディプロマプログラムの概要を説明している「ディプロマプログラムとは」のセクションに限り、日本語版刊行時現在の新たな情報が反映されています。アップデートされた用語がある場合には、ワークショップなどでは最新の用語にそれぞれ読み替えてご利用ください。

非営利教育財団 国際バカロレア機構
(International Baccalaureate Organization)
15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

発行所
International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate
Cardiff, Wales CF23 8GL, United Kingdom

ウェブサイト：www.ibo.org

© International Baccalaureate Organization 2016

国際バカロレア機構（以下、「IB」という。）は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。法令またはIB内部規則もしくは方針に明記されていない限り、IBの事前承諾書なしに、本書のいかなる部分も、形式と手段を問わず、複製、検索システムへの保存、送信を禁じます。詳しくはwww.ibo.org/copyrightをご覧ください。

IBの商品と刊行物は、IBストア (<http://store.ibo.org>) でお求めください。ご注文については、販売・マーケティング部にお問い合わせください。

電子メール：sales@ibo.org

International Baccalaureate、Baccalauréat International および Bachillerato Internacional は、International Baccalaureate Organization の登録商標です。

注： 「Creativity, Action, Service」（創造性・活動・奉仕）という表現は、現在では「Creativity, Activity, Service」（創造性・活動・奉仕）という表現に変更されていますが、本資料にはまだ「Action」（活動）という表現を用いた箇所があるかもしれません。ワークショップの進行中、そのような箇所に遭遇した場合は「Activity」（活動）に読み替えていただくようお願いします。

IBの使命

IB mission statement

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。



IBの学習者像

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。

目次

はじめに	1
本資料の目的	1
ディプロマプログラムとは	2
「音楽」の学習	5
ねらい	9
評価目標	10
評価目標の実践	11
シラバス	12
シラバスの概要	12
音楽の指導の方法	13
シラバスの内容	15
評価	26
ディプロマプログラムにおける評価	26
評価の概要— S L	28
評価の概要— 上級レベル (H L)	29
外部評価	30
内部評価	43
付録	57
指示用語の解説	57
教師参考資料	59

本資料の目的

本資料は、「音楽」を学校で計画、指導、評価するための手引きです。「音楽」の担当教師を対象としていますが、生徒や保護者に「音楽」について説明する際にも、ご活用ください。

本資料は、オンラインカリキュラムセンター（OCC）の教科のページで入手できます。OCC（<http://occ.ibo.org>）は、パスワードで保護されたIBのウェブサイトで、IBの教師をサポートする情報源です。また、本資料はIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。

その他のリソース

教師用参考資料や科目レポート、内部評価のガイダンス、評価規準の説明といったその他のリソースも、OCCで取り扱っています。過去の試験問題とマークスキームはIBストアで取り扱っています。

OCCでは、他の教師が作成したり、活用している教育リソースについて情報を得ることができますので、ご活用ください。教師たちによりウェブサイトや本、ビデオ、定期刊行物、指導案などの役立つリソースも提供されています。

2011年 第1回試験

ディプロマプログラムとは

ディプロマプログラム（DP）は16歳から19歳までの大学入学前の生徒を対象とした、綿密に組み立てられた教育プログラムです。幅広い分野を学習する2年間のプログラムで、知識豊かで探究心に富み、思いやりと共感する力のある人間を育成することを目的としています。また、多様な文化の理解と開かれた心の育成に力を入れており、さまざまな視点を尊重し、評価するために必要な態度を育むことを目指しています。

DPのプログラムモデル

DPは、6つの^{グループ}教科が中心となる核（「コア」）を取り囲んだ形のモデル図で示すことができます（図1参照）。DPでは、幅広い学習分野を同時並行して学ぶのが特徴で、生徒は「言語と文学」（グループ1）と「言語の習得」（グループ2）で現代言語を計2言語（または現代言語と古典言語を1言語ずつ）、「個人と社会」（グループ3）から人文または社会科学を1科目、「理科」（グループ4）から1科目、「数学」（グループ5）から1科目、そして「芸術」（グループ6）から1科目を履修します。多岐にわたる分野を学習するため、学習量が多く、大学入学に向けて効果的に準備できるようになっています。生徒は各教科から柔軟に科目を選択できるため、特に興味のある科目や、大学で専攻したいと考えている分野の科目を選ぶことができます。



図1

DPのプログラムモデル

科目の選択

生徒は、6つの教科からそれぞれ1科目を選択します。ただし、「芸術」から1科目選ぶ代わりに、他の教科で2科目選択することもできます。通常3科目（最大4科目）を上級レベル（HL）、その他を標準レベル（SL）で履修します。IBでは、HL科目の学習に240時間、SL科目の学習に150時間を割りあてることを推奨しています。HL科目はSL科目よりも幅広い内容を深く学習します。

いずれのレベルにおいても、さまざまなスキルを身につけますが、特に批判的^{クリティカル}な思考と分析に重点を置いています。各科目の修了時に、学校外で実施されるIBによる外部評価で生徒の学力を評価します。また、多くの科目で、科目を担当する教師が評価する課題を課しています。

プログラムモデルの「コア」

DPで学ぶすべての生徒は、プログラムモデルの「コア」を形づくる次の3つの必修要件を履修します。「知の理論」（TOK：theory of knowledge）では、批判的^{クリティカルシンキング}な思考に取り組みます。具体的な知識について学習するのではなく、知るプロセスを探究するコースです。「知識の本質」について考え、私たちが「知っている」と主張することを、いったいどのようにして知ることかを考察します。具体的には、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究するよう生徒に働きかけていきます。TOKの目的は、共有された「知識の領域」の間のつながりを重視し、それを「個人的な知識」に結びつけることで、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促していくことにあります。

「創造性・活動・奉仕」（CAS：creativity, activity, service）は、DPの中核です。「IBの使命」や「IBの学習者像」の倫理原則に沿って、生徒が自分自身のアイデンティティーを構築するのを後押しします。CASでは、DPの期間を通じて、アカデミックな学習と同時並行して多岐にわたる活動を行います。CASは、創造的思考を伴う芸術などの活動に取り組む「創造性」（creativity）、健康的なライフスタイルの実践を促す身体的活動としての「活動」（activity）、学習に有益であり、かつ無報酬で自発的な交流活動を行う「奉仕」（service）の3つの要素で構成されています。CASは、DPを構成する他のどの要素よりも、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築く」という「IBの使命」に貢献しているといえるかもしれません。

「課題論文」（EE：extended essay）では、生徒は、関心のあるトピックの個人研究に取り組み、研究成果を4000語（日本語の場合は8000字）の論文にまとめます。EEには、世界を対象に学際的な研究を行う「ワールドスタディーズ」として執筆されるものも含まれます。生徒は、履修しているDP科目から1科目（「ワールドスタディーズ」の場合は2科目）を選び、対象とする研究分野を定めます。また、EEを通じて大学で必要とされるリサーチスキルや記述力を身につけます。研究は、正式な書式で構成された論文にまとめ、選択した科目にふさわしい論理的で一貫した形式で、アイデアや研究結果を伝えます。高

いレベルの研究スキル、記述力、創造性を育成し、知的発見を促すことを目的としており、担当教員の指導のもと、生徒が、自分自身で選択したトピックに関する研究に自立的に取り組む機会となっています。

「IBの使命」と「IBの学習者像」

DPでは、「IBの使命」と「IBの学習者像」に示された目的の達成に向かって、生徒たちが必要な知識やスキル、態度を身につけられるよう働きかけます。DPにおける「指導」と「学習」は、IBの教育理念を日々の実践において具現化したものです。

「音楽」の学習

音楽は、人間や共同社会のアイデンティティとして、また表現手段としての機能を持ち、個人やコミュニティの社会的、文化的価値感を体現するものです。それゆえ、音楽を学ぶことは興味をかきたてられる探究や感性豊かな学びとなり得ます。

音楽は、そこから連想されるものも含め、文化によって大きく異なることはありますが、類似しているところもあります。その多様性を通じて、音楽は絶えず変化し続ける世界のさまざまな扉を開き、我々に世界とのかかわりをもたせてくれます。

活きた音楽教育は、身近な音楽と未知の音楽、両方の世界に対する好奇心とオープンな心を育てます。そのような音楽の学習を通じて、私たちは音、リズムパターンなど、変化してゆく関係性の中で音の構成を聴くことを学びます。また、音楽を学ぶことで、自らの文化と時空を超えた文化との音楽的類似点、相違点、関連性を探究することができます。知識をもち、積極的に音楽にかかわることで、先人の経験とそこに培われた特定の音を組み合わせる手法やその技巧の関係性を探究したり発見したりすることができ、ひいては私たちを取り巻く世界や人間の本質についてより知識を深めることが可能になります。

ディプロマプログラムの音楽コースでは、大学レベルでの音楽学習や音楽の専門家を目指す学生に必要な基礎的な内容を提供します。本コースは音楽以外の道に進む生徒にとっても人生を豊かにする貴重な学習の場となります。「音楽」を履修することは、すべての生徒にとって音楽という世界に生涯かかわりゆくきっかけと成り得ます。

標準レベル（SL）と上級レベル（HL）の違い

標準レベル（SL）と上級レベル（HL）どちらの生徒も**音楽的理解力**の学習は必修です。したがって生徒は全員、音楽学的比較研究を提出し、リスニング試験問題を受けます。後者では、HLの生徒にはさらにもう1つ出題されます。この設問では、IBが指定する2曲を比較分析して「音楽を特徴づける要素のつながり」を調べる必要があります。

音楽を履修するSLの生徒は、以下の3つの選択肢から**1つ**選択します。

- ・ SL創作研究（SLC）
- ・ SLソロ演奏研究（SLS）
- ・ SLグループ演奏研究（SLG）

HLの生徒は、創作研究とソロ演奏研究の両方が必修です。

SLとHLの間で期待される課題内容は大きく異なります。創作と演奏の両方に取り組むことにより、HLの生徒は音楽の学習においてより広い視点をもてるようになり、さらに作品を掘り下げて追及することも可能になります。3つの要素を統合的に学ぶことで、

HLの生徒はそれらの課題の関連性を見い出せるようになるだけでなく、学習の過程においてそれらのつながりがさらに重要な意味をもつようになるでしょう。このような学習をすることによって、HLの生徒はより深く音楽に携わる機会を得ることができます。

創作では、SLCの生徒は課題を2曲、HLの生徒は3曲提出しなくてはなりません。したがって、HLの生徒は、内容や本質や創作意図において対照性を表現できる作品、あるいはより幅広い創作オプションの中から、より挑戦しがいのある作品を選んで発表することが可能です。

ソロ演奏では、SLSの生徒は15分、HLの生徒は20分の演奏を行います。したがって、HLの生徒はより対照的な曲を取り入れたプログラムに挑戦することになります。

グループ演奏を行う生徒（SLG）は、20～30分の演奏時間が必須です。

音楽と事前の学習経験

ディプロマプログラムの音楽コースは、音楽への幅広いアプローチを促し、新しいスキルやテクニック、アイデアを育むことを目的としています。その一方では過去の音楽学習経験を生かす機会が提供できるよう考案されているコースでもあります。

音楽の既習経験は、SLでは必須ではありませんが推奨されています。HLでは非常に強く推奨されています。

MYPとの接続

IB中等教育プログラム（MYP）を修了しているということは、すでにパフォーマンスアートとビジュアルアートの体系化された学習課程での学習経験があるということになります。MYPの生徒は、自身の作品に対する探究的かつ内省的なアプローチを開拓し、社会や世界や人生における音楽の役割について理解を深められるようになっているでしょう。そうすれば、ディプロマプログラムレベルでもさらに経験やスキル、知識、概念的理解を磨くことができます。探究心による内省、評価、芸術的自己表現、協働、コミュニケーションはすべてIB芸術コースの源である信念や価値観にとって不可欠な要素です。

「音楽」と「知の理論」

グループ6の科目を履修する生徒は、さまざまな文化的伝統の知恵や技能、姿勢を育み伝承した芸術的手法を学びます。この「芸術」の科目は、生徒たちに人間というもののわかりにくさを探究し、振り返る機会を与えます。生徒は、さまざまな芸術の素材や技巧を探究することで、芸術の技術的、創造的、表現的、伝達的側面に対する理解を深めることを目指します。

グループ6の科目を履修する生徒は、さまざまな観点から知識を分析します。生徒たちはより伝統的な学問的手法から知識を得ることはもちろん、自らの経験を通して多くの

ことを学びます。芸術の本質は、一般的な知識的領域の探究と、さまざまな芸術の形式のそれぞれに特有の知識を組み合わせることで我々自身やその行動パターン、人間同士の関係、そして我々を取り巻く広い環境を理解するために利用できる、という点にあります。

グループ6の科目は、学際的つながりを明らかにし、個人や文化の力と限界を探究できるよう導くことで「知の理論」(TOK)の精神を補います。芸術はそれを学ぶ者に自分自身の知識の基盤を振り返り、それを疑ってみよう促します。これに加え、ディプロマプログラムの他の科目も芸術的な方法で探究することで、知識の相互依存的性質を理解することができ、「人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続ける」(IBの使命)人物になるよう働きかけられます。

個人的な表現であれ共同的な表現であれ、またレクリエーションや儀式、娯楽、営利的な表現方法であれ、音楽表現は「知の理論」(TOK)の教育的課題と深くかかわっています。より詳細な手引きと情報については、IB資料『知の理論(TOK)』指導の手引きを参照することをお勧めします。

音楽を履修する生徒が考える「知の理論」(TOK)の活動にかかわる問いは、以下のようなものが考えられます。

- ・なぜ芸術は重要なのですか。
- ・芸術の一環といわれる科目の共通点は何ですか。
- ・芸術における感情と理性の役割は何ですか。
- ・ディプロマプログラムの他の科目には、どの程度「芸術」性がありますか。
- ・私たちが芸術を評価する基準は何ですか。その基準の正当性は証明できますか？可能ならば、どのようにですか。
- ・芸術家にはどのような道徳的責任がありますか。芸術家の責任は、他の「知る者」のそれとは違いますか。
- ・「the condition of humans (人間として認識される条件)」と「the human condition (人間として存在するための条件としての人間性)」は違うといわれています。前者は科学で説明できますが、後者の説明には芸術が必要だといわれています。この意見に同意しますか。
- ・音楽の役割とは何ですか。世界中どの時代でも場所でも同じ役割をもっていますか。
- ・音楽には、つくられた時代や場所の価値観、信念、考え方がどの程度、反映されていますか。
- ・ある文化の音楽を異文化の人々に理解してもらうことは、どの程度可能ですか。
- ・音楽家の作品は、既存の文化にどのくらい影響を与えますか。既存の文化は、その中で作品をつくる音楽家にどのくらいの影響を与えていますか。
- ・何をもって芸術作品が「偉大」とされるのでしょうか。その基準は、時代や文化の中で変わったり、異なったりしますか。
- ・ある音階が別の音階よりも自然だということはできますか。
- ・演奏で得た知識は、他の知識に比べてどの程度、違いますか。

- ・ 作曲家の意図は聴衆にとって重要ですか。それはどの程度、演奏に影響するものですか。
- ・ どのようにして音楽で聴衆の感情的な反応を引き起こすことができますか。これは、知るための方法 (way of knowing) の1つといえますか。
- ・ 一部の音楽が政治的組織によって恐れられてきたのはなぜですか。

芸術（グループ6）のねらい

グループ6「芸術」を学習することで、生徒は芸術家がどのように作品をつくりコミュニケーションを図るのかがわかるようになります。「芸術」科目のねらいは、生徒が以下を実現できるようになることです。

1. 生涯にわたって芸術とのかかわりを楽しむ
2. 芸術の知識と振り返りの習慣をもつ批判的な立場から芸術とのかかわる人となる
3. 芸術の動的で変化し続ける特性を理解する
4. 時間、場所および文化を超えた芸術の多様性を探究し、その価値を認める
5. 自信をもつ的確に考えを表現する
6. 認識および分析のためのスキルを培う

「音楽」のねらい

上記に加え「音楽」（SL・HL）では、以下の点もねらいとしています。

7. 個人的にな学びにおいても協働的な学びにおいても、音楽を学ぶ者としての知識を深め、可能性を伸ばす。

評価目標

S LやH Lの音楽コースを修了した生徒には、次のことが期待されます。

1. さまざまな時代、場所、文化的における音楽に関する知識、理解、知覚
2. 音楽の批判的理解の説明や振り返りに際して用いる適切な音楽用語を用いる
3. 時代、場所、文化的側面から見た音楽の比較分析
4. 音楽的要素の探究、コントロール、発展を通じた創作スキル（S L C、H L）
5. ソロ音楽演奏（S L S、H L）、グループ音楽演奏（S L G）を通じての演奏技術
6. 内省的思考を通じた批判的^{クリティカルシンキング}思考のスキル

評価目標の実践

評価目標	対象課題	評価方法
1. 音楽の時代、場所、文化的な知識、理解、認識を証明する。	リスニング試験	外部評価 — マークバンド（採点基準表）のレベルの説明、規準、詳細なマークスキーム（採点基準）
	音楽学的比較研究	外部評価規準
2. 音楽に対する批判的理解を説明し振り返る際に音楽用語を適切に用いる。	リスニング試験	外部評価 — マークバンドのレベルの説明、規準、詳細なマークスキーム
	音楽学的比較研究	外部評価規準
3. 時代、場所、文化的側面から見た音楽の比較分析を証明する。	リスニング試験（HL）	外部評価 — マークバンドのレベルの説明、規準、詳細なマークスキーム
	音楽学的比較研究	外部評価規準
4. 音楽的要素を探究、コントロール、発展させることにより創作スキルを証明する。（SLC、HL）	創作	内部評価規準
5. ソロ音楽制作（SLS、HL）、グループ音楽制作（SLG）によって演奏技術を証明する。	演奏	内部評価規準
6. 内省的思考を通じた批判的思考スキルを証明する。	リスニング試験	外部評価 — マークバンドのレベルの説明、規準、詳細なマークスキーム
	音楽学的比較研究	外部評価規準
	創作	内部評価規準

シラバスの概要

シラバスの構成	推奨される授業時間数	
	SL	HL
音楽的理解力 SL、HLは必修	75	90
創作研究 HLとSLC*のみ必修	75	75
ソロ演奏研究 HLとSLS*のみ必修	75	75
グループ演奏研究 SLG*のみ必修	75	該当なし
総授業時間数	150	240

* SLの生徒は、以下の3つのオプションから**1つ**選択します。

- ・ 創作研究 (SLC)
- ・ ソロ演奏研究 (SLS)
- ・ グループ演奏研究 (SLG)

「音楽」の指導の方法

教師は、コース期間を通してこの音楽の手引きにあるすべてのセクションについて、生徒たちと話し合うことが必要です。SLは2つ、HLは3つの必修部分にわかれています。これらは互いに不可欠な学習です。そのため、各セクションの推奨授業時間数は、音楽コースのさまざまな要素を組み合わせられるよう柔軟に調整していく必要があります。

シラバスには、具体的で正式な学習の詳細が提示してありますが、音楽コースでは、多様なアプローチや指導方法の実施が可能です。ただし、生徒が学習への主体的なアプローチをとり、自らの学習に責任をもつことが大切です。そのため、生徒と音楽教師とのかかわり合いはとても重要になります。教師は、生徒が自分たちの学びの中にシラバスの各要素の創造的なつながりを見出せるよう常に促しつつ、確かな理解力を深めていくための指導や活動を通じて生徒とかかわらなくてはなりません。

音楽コースの期間中、生徒たちは自分にとって馴染みのある音楽もそうでない音楽も、あらゆる時代、土地、文化のものを聞くよう促されるべきです。音楽コースでさまざまなことを学ぶ間、生徒には音楽の全体像に対する理解を深めるためのサポートが必要です。また、コースの早い段階では、履修内容についてさらに十分なアドバイスが必要になるでしょう。ただし、指導においては常に、批判的思考を養い、自主性をもって探究学習をすすめるよう生徒には働きかけていかなければなりません。生徒は個人としても、協働的な学びの中でも最終課題に向けて学習しなくてはなりません。教師と生徒は、IBの学習者像を念頭に置いておくことが大切です。

次の事項に関して幅広い活動をもって生徒に働きかけてください。

- ・ さまざまな時代、場所、文化の音楽に取り組む。
- ・ 批判的に音楽を評価し、適切な音楽用語を使用する。
- ・ 比較分析のための技法を磨く。
- ・ 研究の技能と思考能力を養う。
- ・ 音楽をつくることを学ぶ。
- ・ 音楽を演奏することを学ぶ。
- ・ 個人的に、協働的に学ぶ。
- ・ 時間をかけて自分の課題の成果を継続的に振り返るための思考力を磨く。

教師は、最終課題の準備に向けて生徒たちに助言や指導を行い、コース期間を通じて生徒をサポートし続けます。以下は生徒たちが、かかわりの中で学ぶことを促す指導の一例です。

- ・ 1人の生徒が現在取り組んでいる短い曲の演奏を披露する。
- ・ その演奏を生徒たちが評価する。

- ・ 演奏者が曲の一部を分析し、その内容をグループに発表する。
- ・ 演奏された曲と似た技法を知らない曲の中から見つける。
- ・ (個人または協働で) その特定の技法を用いて曲の一部を作曲し、それを演奏し、それについて話し合う。
- ・ 馴染みのある曲とそうでない曲を比べ、音楽を特徴づける要素のつながりについて列挙する。
- ・ 類似曲の一部を聴き、リスニング試験の解答に適した形式で答えを組み立てる。

音楽コースのすべての教師に対し、<http://occ.ibo.org>にあるオンラインカリキュラムセンター（OCC）への定期的なアクセスを強く奨励しています。OCCは、教師が質問を投稿したり、良い指導例を紹介したり、アドバイスを求めたり、事例集にアクセスしたりすることができるフォーラムです。OCCサイトにあるディプロマプログラムの音楽フォーラムの内容は、音楽教師が音楽教師のために作成しています。また、フォーラムには資料の改訂版やよく寄せられる質問なども掲載されています。

OCCサイト以外にも、音楽コースではさまざまな資料やワークショップを通して教師をサポートしています。

衛生と安全に関するガイドライン

音楽づくりの際には、衛生と安全のガイドラインを適切に順守することが、すべての学校に義務づけられています。音楽を提供する機関として、各学校は衛生と安全を考慮した学習環境を提供する責任と義務を認識しなくてはならず、音楽に携わる生徒と教師の衛生と安全の責任はすべて、それぞれの学校にあります。

シラバスの内容

音楽的理解力— S L ・ H L

シラバスのこのパートはS LとH Lコースの根幹であり、全生徒の必修科目です。

音楽文化を研究、分析、比較、調査、対比する

生徒は、以下の背景から多様な音楽を積極的に聴くことが求められます。

- ・ 世界の地域
- ・ 音楽文化
- ・ 時代

生徒は、以下を学習することで聴覚的認識力と音楽的理解力を養います。

- ・ 形式や構成を含む音楽的要素
- ・ 記譜法
- ・ 音楽用語
- ・ 文脈

生徒は、自分がかかわる音楽を互いに関連づけ、勉強する努力をしなくてはなりません。また、可能であれば、自分が学んでいる作品の間の「音楽を特徴づける要素のつながり」も追求すべきです。

音楽の要素には、音の長さや音程、調性、音質や音色、テクスチュア、強弱、形式、構成などが含まれます。形式と構成には、全体的な形と部分的なものの検討が含まれます。アーティキュレーションや、その他表現的技法や音づくりの技術についても考察し、論じるようにします。

記譜法は音楽文化によってさまざまでしょう。文脈には音楽の文化的、歴史的、様式的側面が含まれます。

生徒は、音楽的要素（形式や構成を含む）や文脈を扱う際に適切な音楽用語を用いる技術を身につけます。

譜例や実例を正確に指し示す方法を学ぶ必要もあります（例えば小節番号を引用する、楽器／声部を提示するなど）。

歌詞のある音楽作品は、その音楽との関連性を考慮すべきでしょう。

教師は、評価に関する詳細や評価規準、それに¹出題数や学習の深さがわかるリスニング試験の見本を参照する必要があります。また、本資料巻末の「指示用語の解説」も必ず参

照してください。さらに、公表されている試験問題、譜面、CD、リスニング試験のマークスキーム（採点基準）も参照してください。

2つの指定課題の学習

音楽的理解力の中で重要なのが、この指定課題の学習です。HLでは2曲を学習します。SLでは2つの指定課題のうち1つを選んで学習します。これらの曲は2つの異なる時代、場所そして／または音楽文化の重要な特徴が表れた曲です。生徒は全員、指定された課題を分析し、考察しなくてはなりません。HLの生徒は**さらに**この2つの指定課題を比較、対比して重要な音楽的結びつきを研究し調べることも求められます。

長い曲で楽章／セクションの指定のある指定課題の場合、その箇所は教師が曲全体の文脈の中で示すようにします。ただし、試験の質問はその特定の楽章またはセクションに関することです。教師には、生徒と一緒に、同じ曲の違う演奏録音を研究することを奨励しています。

2年ごとに出される2つの指定課題に関する詳細は、毎年更新されるIB資料『DP手順ハンドブック』で公開しています。

音楽的比較研究

生徒は、さまざまな音楽文化から生まれた曲の研究を通じて、2つの異なる音楽文化を背景にもつ2曲（またはそれ以上）の間に存在する音楽的関連性を探究、分析、考察するよう促されます*。選択した曲の類似点や相違点の調査研究、分析を行うことで、生徒は「音楽を特徴づける要素のつながり」について論証する方法を学びます。

音楽学的比較研究に取り組むにあたり、生徒は関連性の存在について論証すべく、さらに深く議論を掘り下げる必要があります。例えば、2曲（または2曲以上）の使用楽器の類似性を引用するだけでは不十分です。説得力のある音楽的関連性を説明しつつも、どのようにそれらの楽器が使われているか（旋律的、和声的、構成的、リズム的になど）ということ学び、またさらに深い議論を構築しなくてはなりません。同様に、オペラ「蝶々夫人」（プッチーニ）とミュージカル「ミス・サイゴン」（クロード・ミシェル・シェーンベルク）の関連性を調べる際に、あらすじの類似性を引用するだけでは要件を満たしません。関連性は音楽的なことである必要があります（つまり楽器や歌や音楽の機能ではなく、音楽的要素に基づくこと）。不適切な関連づけの例としては「どちらも舞曲である」、「どちらも聖句を用いている」などがあります。このような場合、生徒は意見を深める方法について助言を求めた方がいいでしょう。例えば、ブラームスの「子守唄」とノルウェー民謡の「子守唄」で、オクターブ中の狭い音程や繰り返されるフレーズの使用を比較するなどして議論を深めることは、望ましい探究例です。

また、例えば、特定の楽器の名称などは、音楽コースで求められる専門用語には含まれないという認識も必要です。つまり、音楽用語とは音楽やその創作プロセスを説明するための言葉ということです。

生徒は必ず一次情報（直接的情報）を活用しなければならず、また二次情報（間接的情報）を使って自らの論文の裏づけを行うことも奨励されています。しかし、探究の大半は独自の論点や考えについてであるべきで、他の資料の単なるまとめであってはなりません。

異なる音楽文化とは、音楽学的比較研究においては以下のように定義されます。

*音楽文化とは、音楽を生み出し、用いることにまつわる伝統や慣習を指し、その伝統はある共同社会によって共有され、通常は世代から世代へと受け継がれるものです。音楽は、文化の中でさまざまな目的に使われます（娯楽、儀式、労働など）。

ひとつの音楽文化が時代や場所を超えて広がることもあり、また、その本質（音楽様式として知られる）は残しつつも一音楽文化の中で多くの創造的変化も見られます。例えば、スカとレゲエの違いは、単一音楽文化（カリブ音楽）の中で起きた創造的変化、つまり単一音楽文化の中にある2つの音楽様式なのです。同様に、スイングとビバップスタイル（ジャズ）は、ルネサンスとロマン派（西洋芸術音楽／クラシック音楽）のように単一の音楽文化の一部なのです。

音楽文化は必ずしも時代や地理上の区分で定義する必要はありません。16世紀のパレストリーナ、20世紀のシェーンベルク、ブラジルのヴィラ＝ロボス、ポーランドのペンデレツキはすべて西洋芸術音楽／クラシック音楽の作曲家、つまり同じ音楽文化に属します。

また、同じ地理的地域だからといって必ずしも同じ音楽文化を意味するとは限りません。例えば、日本でつくられた西洋風のポップミュージックと日本の歌舞伎の音楽は同じ音楽文化には属しません。

その一方では、音楽様式は一連の曲に共通するメロディーの構成、形式、即興、和声、アーティキュレーション、音の長さといった様式化された音楽的特徴のことを意味します。

創作 — S L C ・ H L

創作の学習では、生徒は音楽を形づくる要素の探究、工夫、発展を試みることを通じて創作力を養うことを目標とします。雰囲気、特徴やその他の表現意図をもって音楽的要素を構成するといった創造的活動には自分を律する力や、集中力が求められます。

S L Cの生徒は課題2曲、H Lの生徒は3曲の提出が義務づけられています。

以下のオプションがあります。

- ・ 作曲
- ・ 音楽テクノロジーを用いた作曲
- ・ 編曲
- ・ 即興演奏
- ・ 様式技法による作曲

組み合わせの選択については、「創作オプション」の表を参照してください。

創作オプション					
	作曲	音楽 テクノロジー を用いた作曲	編曲	即興演奏	様式技法 による作曲
SL (課題 2曲)	1～2曲	1～2曲	1曲のみ	1曲のみ	1曲のみ (練習 課題2つ)
HL (課題 3曲)	1～3曲	1～3曲	1曲のみ	1曲のみ	1曲のみ (練習 課題2つ)
各曲の 要件	3～6分	3～6分	3～6分	3～6分	a, c, d, e, g : 16 ～24小節 b : コラール (16小節以上) f : 歌曲 (16小 節以上)
課題の提 出方法	録音 譜面 <small>リフレクティブ・ステートメント 振り返りの記述</small>	録音 振り返りの記述	録音 譜面 振り返りの記述	録音 振り返りの記述	譜面2点 振り返りの記述 2点

生徒が作曲および／または音楽テクノロジーを用いた作曲で2曲(SL)または3曲(HL)選択する場合、教師は、生徒がうまく内容や性質や意図で対比を表せるようサポートしてください。

練習課題の数と種類(「素描」か完成曲かなど)は指定がありません。教師が考案する学習コースは生徒の創作知識やスキルを向上させられるものでなくてはなりません。ただし、生徒の評価は最終的な提出物で決まります。生徒も教師も、最終評価を受けるのは生徒自身の作品であることを念頭においてください。

作曲と編曲を選択する生徒には楽器を用いた演奏による作品の発表を強く奨励しています。ただし、それが難しい場合は電子的に生成された録音でも構いません。(作曲、音楽テクノロジーを用いた作曲、編曲、即興演奏は録音の提出が必須で、例外は様式技法による作曲のみです。その場合においても作品の演奏を試みることを強く勧めます。)

創作にかかわるものや作業中のアイデア、資料の出典、草案、論評はすべて生徒のノートかファイルに保管してください。これらの資料は、コース最後の評価の際に必要な生徒の振り返りの記述を仕上げる際に使います。(これらの資料は提出不要です。教師も審査官も、最終提出の際に生徒のノートやファイルを見ることはありません。)

生徒自身による作品であることを確実にするため、創作は教師の指導監督のもとすすめられます。

作曲

作曲とは、音楽的要素の働きを変化させることによってできる音楽の創作活動です。それは他の音楽の模倣から始まることもありますし、即興から始まることもあるでしょう。

非常に機能的なもの、非常に伝統的なもの、非常に抽象的なもの、それらを混合したもの、何らかの表現目的を満たすよう考案されたものなど、生徒はさまざまな方法を選んで作曲ができます。

伝統楽器、声楽、電子音やコンピューター音など、幅広い表現手段から音源を選ぶことができます。生徒は、選択した楽器の技術的能力（と限界）を理解していることを示さなくてはなりません。歌や伝統楽器の作曲をする生徒は、声や楽器の音域や移調楽器などの特徴を理解していることを示さなくてはなりません。

作品はすべて譜面に仕上げる必要があります。譜面は手書きでもコンピューターのソフトウェアを使ったものでも構いません。

作品それぞれの楽譜の最終稿と録音を提出してください。

S Lの生徒は1～2曲、H Lの生徒は1～3曲の作品を提出することができます。（「創作オプション」の表を参照してください。）

作品の長さは3～6分以内におさめてください。

作曲と一緒に**振り返りのプロセス**^{エビデンス}の証拠として、**振り返りの記述**^{リフレクティブ・ステートメント}を提出します。振り返りの記述では、作品の意図、プロセス、結果からなる創作過程の全容を理解していることを示す必要があります。

音楽テクノロジーを用いた作曲

音楽テクノロジーを用いた作曲では、コンピューターのほか、各種ハードウェアやソフトウェアプログラムを使用します。

音楽テクノロジーを用いた作曲では、以下をいくつか、またはすべて使ってスキルや創造性を表現します。

- ・ M I D I（Musical Instrument Digital Interface）ベースのプログラム
- ・ シーケンスソフト
- ・ 音源ソフト
- ・ 録音
- ・ アナログ・シンセサイザー
- ・ コンクレート・サウンド（musique concrete）
- ・ 各種ハードウェア

最終作品では、あらかじめ録音されたループ（ドラムループなど）は使用できません。

作業の一部が校外で実施される場合でも、教師は生徒自身の作品であることを確認する必要があります。

音楽テクノロジーを用いた作曲は、映画、ビデオ／DVD（など）用、あるいは独立したオリジナル曲として制作できるかもしれません。（ただし、提出は作品と振り返りの記述のみです。教師と審査官がそれ以外の資料を見ることはありません。）

生徒は、音楽テクノロジーを用いた作曲の録音を必ず提出しなければなりません。

音楽テクノロジーを用いた作曲は、SLの生徒は1～2曲、HLの生徒は1～3曲、提出できます。（「創作オプション」の表を参照してください。）

作品の長さは3～6分以内におさめてください。

音楽テクノロジーを用いた作曲と一緒に**振り返りのプロセス**^{エビデンス}の証拠として、振り返りの記述を提出します。^{リフレクティブ・ステートメント}振り返りの記述では、作品の意図、プロセス、結果からなる創作過程の全容を理解していることを示す必要があります。

編曲

編曲とは、既存の音楽を生かしたうえで、再び手を加える一連の作業のことです。

生徒は、既存の曲をさまざまな楽器、声楽、電子メディア、もしくはそれらの組み合わせ用に編曲することが求められます。異なる楽器のために書き直すのみのトランスクリプションは受けつけられません。編曲は、原曲にある音楽的要素の働きを巧みに工夫し直すだけでなく、クリエイティブな判断をひとつひとつ積み重ねた上で創作された独創性を表すものでなくてはなりません。新しい要素を加えることは妥当ですが、原曲が認識できるということは重要です。

原曲はどの音楽文化のものでも構いませんが、必ず五線譜で表現してください。楽譜は手書きでもコンピューターのソフトウェアを使ったものでも構いません。

編曲の楽譜と録音に加えて、原曲の楽譜も提出してください。（楽譜がない場合は録音でも構いません。）

提出できる編曲は1曲のみです。（「創作オプション」の表を参照してください。）

作品の長さは3～6分以内におさめてください。

編曲と一緒に**振り返りのプロセス**の証拠として、振り返りの記述を提出します。振り返りの記述では、作品の意図、プロセス、結果からなる創作過程の全容を理解していることを示す必要があります。

即興演奏

即興演奏とは、動機づけられて即座に創作しながら演奏する音楽表現です。他の音楽様式を真似ることから始まることもありますし、他の動機を得て生まれることもあるでしょう。良い即興演奏には全体像や方向性や独創性が見られるもので、さまざまな方法で着想を得ていることがあります。多様な音楽的要素を巧みに操作することで音楽の可能性に対する理解が深まります。さまざまな楽器やボーカルのテクニックを使うことで、より即興性が高まります。

即興演奏には以下をはじめとした、さまざまな形態があります。

- ・ ジャズバンドやコンボでの演奏の中に現れる即興演奏

- ・ 他の演奏者との自由即興
- ・ ソロでの即興演奏

即興演奏は一続きのものでも複数セクションの組み合わせでも構いません。ただし、演奏時間は3～6分以内におさめてください。複数のセクションにわかれた即興演奏の場合、評価対象は即興部分だけですが、教師は必ずその曲の演奏をすべて録音してください。

提出できる即興演奏は1曲のみです。（「創作オプション」の表を参照してください。）

即興演奏の録音の提出は必須です。他の演奏者との即興の場合、生徒の演奏箇所は録音上でも明確に識別できるようにしてください。

即興演奏と一緒に^{リフレクティブ・ステートメント}振り返りのプロセスの証拠として、振り返りの記述を提出します。振り返りの記述では、作品の意図、プロセス、結果からなる創作過程の全容を理解していることを示す必要があります。

様式技法による作曲

様式技法とは、既存の作曲様式の研究です。

生徒はa～gの中から2つの練習課題を選びます。例えばbとdを選択したとすると、これで課題の1曲ということになります。

これ以外の創作の提出物は、作曲、音楽テクノロジーを用いた作曲、編曲、即興演奏の中から選択します。（「創作オプション」の表を参照してください。）

生徒は、選択した様式技法に沿った楽器の音域や声域、移調楽器などの特徴を理解していることを示さなくてはなりません。

以下の場合を除き、楽想記号や強弱記号の表示は含まないものとします。

- ・ 18世紀の弦楽四重奏 (e)
- ・ 19世紀の歌曲の伴奏 (f)
- ・ 十二音技法 (g)

さらに、18世紀の弦楽四重奏 (e) はアーティキュレーションも含む必要があります。

課題はすべて五線譜で表してください。手書きでもコンピューターのソフトウェアを使ったものでも構いません。

- ルネサンスの声楽的対位法**（例：ラッツ、モーリー、パレストリーナ）（16～24小節）。この課題は、2声部の1声か、3～5声部のうち1声を除く全声部が教師によって予め指定されている課題のどちらかになります。いずれの場合も、空白声部の最初の2、3音は必ず与えられています。生徒が空白声部を作成します。声部すべてに歌詞が必要です。完成された課題はかならず模倣を用いなくてはなりません。生徒の声部をはっきり識別できるようにし、引用元（曲名、作曲者名両方）も明らかにする必要があります。
- バッハのコラール**：完全な状態のコラールの旋律（16小節以上）が教師から生徒に与えられます。旋律は引用したものを使用します。生徒は下の3つの声部を作成します。なお、必ず転調を含むものとします。

- c. **バロック様式の通奏低音奏法** (16～24小節)：教師から、楽器か声の旋律部とともに数字付低音が与えられます。いずれも完全な形で提供されなくてはなりません。生徒は数字付低音の和声を組み立てなくてはなりません。必ず転調を含むものとします。必ず転調を入れます。生徒の創作部分をはっきり識別できるようにし、引用元(曲名、作曲者名両方)も明らかにする必要があります。
- d. **18世紀の2声の器楽的対位法** (例：バッハ、ヘンデル) (16～24小節)：教師から与えられる曲の冒頭は2～5小節です。選択した課題にはかならず模倣と転調を含むものとします。生徒の創作部分をはっきり識別できるようにし、引用元(曲名、作曲者名両方)も明らかにする必要があります。
- e. **18世紀の弦楽四重奏** (例：ハイドン、モーツァルト) (16～24小節)：この課題は、第1楽章の提示部あるいはメヌエット(この限りではないが)にすることも可能です。第1ヴァイオリンのパートが完全な形で教師から生徒に与えられます。そして生徒は他の3パート声部を作成します。必ず転調を含むものとします。生徒の創作部分をはっきり識別できるようにし、引用元(曲名、作曲者名両方)も明らかにする必要があります。
- f. **19世紀の歌伴奏** (例：シューベルト、シューマン) (16小節以上)：課題となるのは1曲すべて、あるいはその一部です。歌詞つきの声楽パートが教師から生徒に与えられ、生徒はピアノ伴奏を作成します。必ず転調を含むものとします。生徒の創作部分をはっきり識別できるようにし、引用元(曲名、作曲者名両方)も明らかにする必要があります。
- g. **十二音技法** (16～24小節)：引用元(曲名、作曲者名両方)を明らかにした、もしくは教師自身が作成し、その旨を明確に示した音列の提示が教師から与えられます。音列とその置換操作は必ず課題の中に明記します。課題の対象はオーケストラで使用される2つの楽器か鍵盤楽器です。

様式技法による作曲の2つの練習課題と一緒に**振り返りのプロセス**の証拠として、リフレクティブ・ステートメント振り返りの記述を提出します。振り返りの記述では、作品の意図、プロセス、結果からなる創作過程の全容を理解していることを示す必要があります。

演奏研究

演奏の学習では、生徒はソロまたはグループでの音楽づくりを通して演奏技術を磨くことを目指します。演奏では、音楽を再現することを学ぶ際に自己鍛錬と集中力が求められます。

ソロ演奏研究 (S L S・H L)

生徒は、1回以上の公演で演奏した曲から選んだ録音音源を提出します。演奏時間の合計は以下のとおりです。

- ・ S L — 15分
- ・ H L — 20分

演奏を録音するのは、内部評価で生徒の達成した実績がよく表れるような演奏を提出するため、後で対照的な曲を複数選択できるようにするためです。ディプロマプログラムの音楽教師は、その録音が間違いなく生徒自身の演奏であることを必ず確認できなくてはなりません。

演奏では以下のいずれかの方法を使用できます。

1. 各種楽器、声楽
2. 楽器としてのコンピューター

1と2を組み合わせることは**できません**。

音楽の様式は問いません。ただし、提出演奏課題は対照的な曲の組み合わせで、生徒の実力を発揮できるものにしてください。提出課題には、生徒が履修中に達成した実績を表せるよう選択してください。

音楽テクノロジーによる演奏

音楽テクノロジーを選択する生徒は、必ず既存の曲を使い、それを演奏や様式の特徴が表現された録音演奏の形で発表してください。つまり、伝統的な楽器演奏にあるようなアーティキュレーション、強弱、フレーズング、テンポ、音色、パートのバランス、その他付随する音楽的特性に細心の注意を払わなくてはなりません。

音楽テクノロジーにおける既存曲の演奏は、同時に演奏されるパートを4つ以上とり入れる必要があります。ただしドラムキットは1つのパートとみなされます。逆に、ベース、ピアノ、ドラム、サクソフォンによるジャズコンボも、鍵盤楽器による4声フーガや弦楽四重奏の演奏と同様に、要件を満たします。

パートはすべてMIDI入力が必要です。サンプリングされたパートやドラムループは、サンプリングの音源が生徒自身の演奏によるものであると教師が確認できた場合に限り許可されています。

小グループによる演奏

生徒は、小グループのメンバーとして参加している演奏曲も**1つ**選択してソロ楽器の選曲の一部とすることができます。ただし、その小グループでのその生徒の演奏箇所は、他声部と同旋律となることは最小限に抑えられなければならない、明確に聞き分けられるものでなくてはなりません。また、曲の大半部分を占めるものとします。作品の長さは5分を超えてはなりません。

音楽テクノロジー演奏のソロ演奏にはすでに4つの楽器が含まれているため、音楽テクノロジー演奏を選択する生徒は小グループによる演奏を提出**できません**。

伴奏のガイドライン

伴奏については、提出する演奏録音は音楽作品の本来の演奏形式にしたがって行われる**ものとします**。例えばフルートとピアノ伴奏用に作曲された曲の場合、ソリストと伴奏者

の両方による演奏が必要です。本来の演奏形式と認められない録音音源による伴奏は、極力避けてください。

場合によっては、演奏会では伴奏パートに複数の演奏者を伴うことがあります。例えばジャズサクソフォーン奏者は慣習的にピアノ、ギター、ダブルベース、ドラムと演奏します。別の例を挙げれば、ロックバンドの歌手はエレキギター、ベースギター、ドラムの伴奏が付きまゝ。これらの場合、大勢の演奏者が伴奏をしていますが、グループの編成としてはソロと伴奏とみなします。そのため、このような特定のケースでは、曲は依然としてソロ曲とみなされます。また、例えば協奏曲の場合などピアノリダクション譜による伴奏も基準を満たします。

グループ演奏 研究— S L G

この S L オプションを選択する生徒は、コースの履修中、定期的に公演を行う音楽グループの一員として常時参加活動していることが求められます。

ディプロマプログラムの音楽教師は、グループやそのレパートリーが生徒にとって適切であるかどうか、グループ全体の特性や能力に対して、生徒の特性や能力がどうかなどを尊重しながら、生徒に助言を与えてください。

ディプロマプログラムの音楽教師が編成するグループや学内で活動するグループのみに限定される必要はありません。

グループのメンバーの内訳は、このオプションの基準を満たすようにリハーサルや演奏会が計画できるのであれば全員または一部がディプロマプログラムの音楽コースの生徒であって構いません。

2人の小グループでも可能です。ただし、それぞれの演奏者の音楽的比重は平等でなくてはなりません。別の生徒の伴奏を伴うソロ演奏はグループ演奏とは解釈されません。

このオプションでは、(ソロ演奏のオプションで定義されるような) コンピューターを楽器として使用することは許可されていません。

以下は音楽グループ（規模や形態を問わず）の一例です。

- ・ 合唱団
- ・ オーケストラ
- ・ コンサートバンド／ウィンドバンド
- ・ ロックバンド／ポップバンド
- ・ 室内楽団

評価では、同一グループで2回以上、公演で演奏した録音を提出してください。

演奏時間の合計は以下のとおりです。

- ・ 20～30分

要件

生徒は1つのグループでの演奏のみ評価され、このグループの一員でこの S L オプションを選択するディプロマプログラムの生徒は、それぞれ同じ成績を受けとります。

生徒は、どんな合奏活動においても通例であるような練習やリハーサルに継続的に参加し、定期的に公の場で演奏を発表する必要があります。

グループは、コース履修中に2回以上の公演で録音した演奏から選択した曲一式を提出する必要があります。

ディプロマプログラムの音楽教師は、自分がそのグループの指揮者でも顧問でもない(学内の他の教師や学内または学外の音楽家が率いるグループなど)場合は、必ず生徒の録音が生徒自身の演奏であることを確認できなくてはなりません。

教師はグループの指揮者、顧問、伴奏者になることができます。大規模なボーカルグループは伴奏者も許可されています。ただし、評価を受ける音楽グループに音楽教師やプロの音楽家が演奏者として参加することはできません。

選択したグループは、グループのタイプやレパートリーによっては伴奏がついてもつかなくても構いません。例えば、ボーカルグループはアカペラの曲でもピアノや楽器伴奏付きの曲でも発表できます。ただし、グループの伴奏は演奏形式上の慣習に沿ったものでなくてはなりません。しかしながら、評価を受けるのはグループであって伴奏者ではありません。

ディプロマプログラムにおける評価

概要

評価は、指導および学習と一体化した要素です。DPでは、カリキュラム目標の達成を支援し、生徒に適切な学習を促すことを評価の最も重要なねらいとして位置づけています。DPでは、外部評価と内部評価の両方が実施されます。外部評価のための評価課題はIB試験官が採点します。一方、内部評価のための評価課題は教師が採点し、IBによるモデレーション（評価の適正化）を受けます。

IBが規定する評価には次の2種類があります。

- ・ 形成的評価（**formative assessment**）は、指導と学習の両方に指針を与えます。生徒の理解と能力の発達につながるよう、学びの種類や生徒の長所と短所といった特徴について、生徒と教師に正確で役立つフィードバックを提供します。また、形成的評価からは、科目のねらいと目標に向けての進歩をモニタリングするための情報が得られるので、指導の質の向上にもつながります。
- ・ 総括的評価（**summative assessment**）は、生徒のこれまでの学習を踏まえて、生徒の到達度を測ることを目的としています。

DPでは、主に履修期間の終了時または、終了間近の生徒の到達度を測る総括的評価に重点が置かれています。ただし、評価方法の多くは、指導および学習期間中に形成的に用いることもでき、教師はそうした評価を実施するよう推奨されています。総合的な評価計画は、指導、学習およびカリキュラム編成と一体を成すものです。詳細は、IB資料『プログラムの基準と実践要綱』を参照してください。

IBが採用する評価アプローチは、相対評価ではなく絶対評価です。この評価アプローチは、生徒の成果を特定の到達規準に照らし合わせ、そのパフォーマンスを判断するものであり、他の生徒の成果と比較するものではありません。DPにおける評価について、詳細はIB資料（英語版）『*Diploma Programme assessment: Principles and practice*（DPにおける評価：原則と実践）』を参照してください。

OCCでは、DPのコースデザイン、指導および評価の分野で教師を支援するための多様なリソースを取り扱っており、これらはIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することができます。また、他の教師から寄せられたリソースのほか、教師用参考資料、教科レポート、内部評価の手引き、評価規準の説明もOCCで取り扱っています。見本や過去の試験問題、マークスキームはIBストアで購入できます。

評価方法

I Bは、生徒の成果を評価するにあたり、複数の方法を採用しています。

評価規準

評価規準は、自由解答方式の課題に対して適用されます。各規準は生徒が身につけることが期待されている特定の能力に重点を置いています。評価目標は「何ができるべきか」を、評価規準は「どの程度よくできるべきか」を表します。評価規準を採用することで、それぞれ解答の違いを識別することが可能となり、多様な解答を奨励することにつながります。

各規準は、到達度別に段階的に並べられたレベルの説明で構成されています。各項目には1つまたは複数の評点が設けられています。また、採点ではベストフィットモデルを用いて、各規準を個別に適用します。規準の最高点は規準の重要度によって異なる場合があります。各規準での合計得点が、その課題に対する総合点となります。

マークバンド（採点基準表）

マークバンド（採点基準表）は、解答の評価の際に参考基準となる、期待されるパフォーマンスを一覧にまとめた表です。全体を1つにまとめた規準を、到達度に沿って段階的な項目に分けています。生徒の成果の違いを識別するために、各レベルの説明項目の点数には幅をもたせてあります。レベル分けされた説明項目のどの評点を付与するか確定するには、ベストフィット（適合）アプローチを用います。

マークスキーム（採点基準）

この用語は、特定の試験問題のために用意される分析的マークスキーム（採点基準）を指します。分析的マークスキームは、生徒に特定の種類の答案や最終的な答案を要求する試験問題のために作成されます。これらは、各設問に対する総合点を生徒の解答の異なる部分についてどのように配分するかについて試験官に詳細な指示を与えるものです。マークスキームには、試験問題の解答で求められる内容や、評価規準の適用方法についての手引きとなる採点上の注意事項などが含まれます。

採点のための注意事項

評価規準を用いて採点される評価要素には、^{コンポーネント}「採点のための注意事項」（marking note）がついている場合があります。採点のための注意事項は、設問に課されている特定の要件に対し、評価規準をどのように適用するかについて指針を示すものです。

評価の概要 — S L

2011年第1回試験

コンポーネント 評価要素	配点比率
<p>外部評価 (75時間)</p> <p>リスニング試験 (2時間) 音楽的理解力に関する問題4問 (80点)</p> <p>セクションA 1問に解答する。 設問1 または 設問2 (20点)</p> <p>セクションB 3問に解答する。 設問3 または 設問4 (20点) 設問5 (20点) 設問6 (20点)</p> <p>音楽学的比較研究 異なる音楽文化からとり上げた2つ(以上)の曲の間の「音楽を特徴づける要素のつながり」についての研究を2000語(日本語の場合は4000字)以内で記した文書形式のメディアスクリプト (20点)</p>	<p>50%</p> <p>30%</p> <p>20%</p>
<p>内部評価 (75時間)</p> <p>本要素はコース修了時に教師によって内部評価が行われ、外部からIBによって評価の適正化が実施されます。 生徒は、以下のオプションのうち1つを選択します。</p> <p>創作 (SLC) 録音とレポートを添えた、課題2曲。(30点)</p> <p>ソロ演奏 (SLS) 1回以上の公演での発表から選んだ15分の演奏録音。(20点)</p> <p>グループ演奏 (SLG) 2回以上の公演での発表から選んだ20～30分の演奏録音。(20点)</p>	<p>50%</p>

外部評価

リスニング試験の評価には、3種類の手法が用いられます。

- ・ 試験問題用の詳細なマークスキーム（採点基準）
- ・ マークバンド（採点基準表）
- ・ 評価規準

マークバンド（採点基準表）と評価規準は、本資料に記載されています。マークバンド（採点基準表）と評価規準は、音楽コースのために設定された評価目標や音楽の採点基準の説明と連動しています。マークスキーム（採点基準）は試験ごとにその試験に準拠して作成されます。

音楽的比較研究の評価に用いられる手法は1つです。

- ・ 評価規準

評価規準は、本資料に記載されています。評価規準は、音楽コースのために設定された評価目標や音楽の採点規準の説明と関係しています。

外部評価の詳細 — S L ・ H L

リスニング試験

時間：S L—2時間、H L—2時間30分

配点比率：30%

I Bが推奨するリスニング試験の準備過程となる授業時間数は、S Lで45時間、H Lで60時間です。

リスニング試験の問題は、音楽的理解力に関するもので、S LとH Lには分析と研究、さらにH Lには比較と対比に関する出題がなされます。問題は2つの必須セクション（AとB）から成ります。

S Lの生徒は4つ、H Lの生徒は5つの設問に答えます。セクション（と設問）の解答順序は問いません。

各セクションの各設問の最高点は20点です。リスニング問題の最高点は、S Lは80点、H Lは100点です。

生徒は実例を挙げて解答することが求められます。箇条書きでも構いませんが、音楽的な根拠に論述がなされることが重要です。試験に向けての準備の際は、必ず「指示用語の解説」を参照してください。

設問はすべて外部評価規準を用いて外的に評価されます（本資料「外部評価規準— S LとH L」参照）。セクションAの評価には、マークバンド（採点基準表）が適用されます。

セクションBには、評価規準が適用されます。また、各試験セッションのリスニング試験には、特別なマークスキーム（採点基準）が用意されます。

リスニング試験では、コースの評価目標 1、2、6 の成果を評価し、さらにHLのみ評価目標 3 も評価します。

すべての試験で、SLとHLの生徒は、試験開始前に設問を読む時間が5分間、与えられます。この時間中には試験用CD内の曲の抜粋を聴き始めることもできます。

リスニング試験				
SL 2時間			HL 2時間30分	
セクションA	設問1 または2	分析と考察に関する設問：指定課題作品	設問1 または設問2	分析と考察に関する設問：指定課題作品
			設問3	比較と対比に関する設問（音楽を特徴づける要素のつながりを強調する）：指定課題作品
セクションB	設問3（譜面あり）または設問4（譜面なし）	分析と考察に関する設問：西洋芸術音楽	設問4（譜面あり）または設問5（譜面なし）	分析と考察に関する設問：西洋芸術音楽
	設問5	分析と考察に関する設問：ジャズ／ポップス	設問6	分析と考察に関する設問：ジャズ／ポップス
	設問6	分析と考察に関する設問：世界の音楽	設問7	分析と考察に関する設問：世界の音楽

試験用CDはIBから提供されます。各生徒用のCDプレイヤー（分と秒が表示できるもの）は学校が準備してください。

セクションA — SL・HL

セクションAでは、IB資料『DP手順ハンドブック』で指定する2つの作品に焦点を当てます。

SLの生徒は、設問1と2のうちの1問に解答します。

- ・ 設問1と2は、分析と考察に関する設問で、各指定課題作品に関することです。生徒は2つの設問のうちの1問に解答します。

HLの生徒は設問1と2のうちの1問と設問3の合計2問に解答します。

- ・ 設問 1 と 2 は分析と考察に関する設問で、各指定課題作品に関するものです。生徒は 2 つの設問うちの、1 問に解答します。
- ・ 設問 3 では、「音楽を特徴づける要素のつながり」を挙げて 2 つの指定課題作品を比較、対比します。

連続 2 年分の指定課題作品 2 曲については、毎年発行される I B 資料『D P 手順ハンドブック』で公開しています。

学校は、リスニング試験時に、各生徒に指定課題曲の譜面を準備します。譜面には書き込みや印などが無いことを確認してください。(譜面によっては、序文など試験中の生徒に有用な情報が入った追加情報が含まれている場合があります。学校は、そのようなページが試験中に使用できないよう、しっかりと閉じてあることを確認してください。)

セクション B — S L ・ H L

生徒は、以下の音楽を含む、さまざまな時代や地域の音楽についての分析と考察に関する 3 つの問いに解答しなければなりません。

- ・ ジャズ／ポップス
- ・ 西洋芸術音楽
- ・ 世界の音楽

本セクションの 3 つの設問のうちの 1 問は、2 曲の西洋芸術音楽曲の抜粋から 1 曲を選択して解答します。

セクション B は、さまざまな時代、地域、音楽文化から選ばれた曲の抜粋に基づく内容です。抜粋された曲については明記されている場合とそうでない場合があります、譜面がある場合とそうでない場合があります。

録音された曲の抜粋の特徴について、生徒は音楽的理解力で得た知識を、以下を用いて述べなければなりません。

- ・ 分析
- ・ 考察
- ・ 曲の抜粋で聴いた内容の詳細な論考 (論拠や仮説を含む)

スコアがある場合は小節、小節番号、リハーサル番号、楽器のパートなどを指し示し、譜面がない場合は時間 (分と秒) をはっきりと指します。

解答では、音楽的要素 (構成含む) と音楽的文脈 (文化的、歴史的、様式的側面) の両方を取りあげなくてはなりません。音楽的要素や文脈を取りあげる際には音楽に関する言葉を適切に用いる必要があります。

解答の根拠を示したりより詳しく述べるために譜例を用いることも可能です。

歌詞つきの曲の場合は、その音楽との関連性を考えます。

音楽的比較研究 — S L ・ H L

配点比率：20%

I B では、音楽的比較研究のための学習時間として、S L、H L とともに 30 時間を割り当てることを推奨しています。

音楽学的比較研究は、外部評価規準を用いて外部で評価します（本資料の「外部評価規準 — SLとHL」参照）。

音楽学的比較研究では、生徒が調査に自主的かつ持続的に取り組むことが求められます。この研究は、生徒が各音楽文化の1曲（以上）を研究し、2つの異なる音楽文化の曲の間にある音楽的なつながりを調べる機会を得られるよう工夫されています。

これらの曲の比較探究、分析、考察により、生徒は「音楽を特徴づける要素のつながり」、つまり**音楽的要素**にかかわる関連性を2つ以上示さなくてはなりません。

これら2つの音楽的関連性は、音楽学的比較研究のカバーシートと提出する「メディアスクリプト」（メディア表現形式に応じた原稿）の冒頭部分のどちらにも明記してください。

明白な議論を構築して音楽的要素のつながりを論証するため、生徒は、特定の2つの異なる音楽文化から1曲（以上）ずつを選び、その曲の間にある相違点と類似点を正確に説明、分析、考察する 必要があります。音楽学的比較研究について書く際は、その2つの音楽文化について同配分の文字数を割いて論述するように配慮しなくてはなりません。

研究に選ぶ2つの音楽文化は歴然と区別できるものである必要があります。また実例として選択する曲は異なる音楽文化に属していることが明らかにわかるようなものでなくてはなりません。（一方が他方に影響を与えたような性質の2曲は**選ばない**ようにしてください。例えば、インド音楽の影響を受けたビートルズの曲など）。

音の長さや高さ、調性、音質や音色、テクスチュア、強弱、形式／構成などをはじめ、その音楽に見られるさまざまな作曲技法上の特徴を調べていきます。音楽作品に歌詞がある場合は、その音楽との関連性も考慮すべきです。

また、オペラや交響曲全曲などは、この研究で取り扱うには大曲すぎるため、詳細まで十分に分析することは難しいことを指摘しておきます。したがって、場合によってはオペラや交響曲の1楽章分などの、一部分を分析することも認められます。ただし、その曲のあるセクションや一部は生徒が発表する論点を裏づけるに十分な長さがあることが必要です。同様に、多くの曲を使いすぎると説得力のある議論が失われることがあります。

異なる評価要素に同じ研究テーマを選ぶ場合は、その研究テーマはまったく違った形で取り扱われなくてはならず、さもなければ規則違反とみなされる可能性があります。音楽の課題論文を選択する生徒は、音楽学的比較研究の材料と共通性のない調査課題に取り組むべきです。（IB資料『一般規則：ディプロマプログラム』を参照してください。）現在の指定課題は、音楽的関連性では**選ばない**ことがあります。

形式

音楽学的比較研究を、**2000語**（日本語の場合は4000字）以内にまとめた文書形式の**メディア表現形式に応じた原稿（メディアスクリプト）**として提出しなくてはなりません。

21世紀のメディア表現形式にはラジオ、テレビ、CD-ROM、インターネット、印刷された記事や講演をはじめとした沢山の形式があります。音楽学的比較研究はさまざまなメディア表現形式を想定して作成することが可能です。考えられる可能性として、わかりやすいナレーションやインタビュー、ドラマ化などが挙げられます。ただし、**焦点はあくまでも音楽自体でなくてはならず**、伝記や社会的言説など音楽的比較研究からそれてしまう

ようなものであっては**なりません**。内容をおろそかにして余談に焦点を当てたようなスクリプトでは評価要件を満たしません。

メディアスクリプトの長さは、SLとHLともに引用文を除いて**2000語**（日本語の場合は4000字）以内におさめてください。多様なメディアスクリプトの形式は、生徒の音楽的比較研究の長さに影響することがあります。例えばウェブサイトの一部として図表形式で相違点を示した場合、雑誌の記事やラジオ番組のような説話体で書く生徒より少ない字数でも同じ結果を出すことができます。いずれのタイプのメディア形式でも同等に認められます。そのため使用字数にはある程度の柔軟性があります。

2000語（日本語の場合は4000字）を超えた場合、試験官が評価の対象とするのは最初の2000語（日本語の場合は4000字）のみです。判断が難しい場合は、どこで制限字数が切れるかについて試験官が判断を下します。

以下の要素は字数に含まれ**ません**。

- ・ 引用文（スクリプトの本文で使われる資料より引用された文面）
- ・ 出典の記載
- ・ 参考文献目録
- ・ ディスコグラフィ

以上の範囲規定のため、コンピューターの一括文字カウントツール機能の使用は勧められません。手動範囲指定しながらのカウントが必要です。

外部評価のため、どのメディアを選択した場合でも、生徒はメディアスクリプトを書面で提出しなければなりません。例えば、ウェブサイトとして当課題に取り組むことを選択した場合は、評価用にそのスクリーンショットを印刷して提出する必要があります。電子版で、音楽学的比較研究を提出することになる場合は、試験期の前にあらかじめその旨、学校に通達がなされます。

付録資料としては、提起した論点の具体例となる音楽の抜粋を録音したCD（5分以内）や楽譜、写真、図表などの印刷物が含まれます。

出典

文書のメディアスクリプトには、使用した一次資料（直接的資料）、二次資料（間接的資料）のいずれも出典を記載する必要があります。すべての情報は、ハーバード方式などの一般的な著者名・発行年方式を使い、参照する必要があります。

ウェブアドレスに言及するだけでは不十分です。著者名、記事や記述のタイトル、そのサイトへのアクセス日を記載しなくてはなりません。

一次資料を調べることは必須で、これには生演奏、録音、ウェブ配信のストリーミング、楽譜、インタビュー、その分野の専門家との議論などが含まれます。二次資料には教科書、ドキュメンタリー、記事などが含まれます（書面形式、電子形式どちらでも構いません）。

参考文献は必ず明示しなくてはならないため、本文内に出典を挿入することができない形のメディアスクリプトの場合は、脚注をつけてください。

参照資料や引用文献を適切に選び、知的な根拠に基づいて関連性を示す論点について効果的な独自の探究に対して、生徒は評価を得ることができます。スクリプトの大半は生徒独自の考察を表すものとし、他の資料の要約にならないよう必ず注意を払ってください。参考文献目録とディスコグラフィーは必須です。

教師の役割

生徒が初稿を書き終えるまでの間、教師には以下のことが求められます。

- ・ 生徒に、「音楽を特徴づける要素のつながり」の概念を理解していることを確認したうえで、音楽学的比較研究のメディアスクリプトとはどのようなものかを教える
- ・ 生徒がいつでも評価規準を参照できるようにする
- ・ 2つの音楽文化やその楽曲例を選ぶ段階での助言を行う。ただし、最終的な決定の責任は生徒が負う
- ・ 研究の初期段階で、音楽的要素のつながり、類似点や相違点を詳しく述べた概念的構成について考え、一次、二次資料などを提出するよう求める
- ・ 課題の準備において生徒を指導、援助し、文献にアクセスできる環境を提供する
- ・ 音楽学的比較研究に相応しい文章の書き方を指導する
- ・ 学問的誠実性や学問的公正さとはどういうものかということ、文献の引用も含めて、生徒に理解させる

教師は、定期的に経過を観察し、必ず以下を確認してください。

- ・ 生徒独自の研究であること

最終的な課題の提出前に、教師は必ず以下を行うようにしてください。

- ・ 音楽を特徴づける要素のつながりなどがカバーシートに記載され、署名されていることを確認する
- ・ カバーシートを記入し、教師名の欄に署名をする

助言

音楽的比較研究を完成させる過程で、生徒は完成した全体草稿を提出し、教師に適切なフィードバックをもらわなくてはなりません。この過程において、教師はこの草稿に関してのみ助言が可能です。助言は口頭または書面のいずれかで、改善方法を指摘できます。書面の場合は、生徒の草稿に大量に注釈をつけたり編集したりしてはいけません。この初稿の次に教師へ手渡されるものが最終稿となります。

対話とサポート

生徒は、指導を求めることで不利になることはありません。ただし、生徒が実質的に教師の支援なくして音楽学的比較研究を完成することができなかつたという場合は、その旨をIB資料『DP手順ハンドブック』の所定のフォームに記録してください。

学問的誠実性

教師は、提出された資料が生徒独自の課題研究であることを必ず確認しなければなりません。評価のため提出した成果物はすべて公正であること、その中にある他者の著作物や考えは完全な形で出典が明記されていることに対して、生徒に最終的な責任が課されます。また、生徒は全員、自分の成果物に添付するカバーシートの宣言に署名しなくてはなりません。さらに教師もまた、教師の知る限りにおいて成果物が生徒本人によるものであり、その最終稿であることを証するため、音楽学的比較研究のカバーシートに署名をしなくてはなりません。学問的誠実性についての詳細は、最新の I B 資料『学問的誠実性』を参照してください。

外部評価規準 — S L ・ H L

リスニング試験 — セクション A (S L ・ H L)

この規準は、以下に記す生徒の能力を対象としています。

- ・ 設問 1 または 2 — 指定の 2 曲のうち 1 曲について、主要な音楽的要素（形式や構成など）を分析し考察する。
- ・ 設問 3 — 「音楽を特徴づける要素のつながり」に焦点を置いて、指定の 2 曲を比較、対比させる。

採点	レベルの説明
0	解答は、以下に記す基準に達していない。
1-4	解答は設問にほぼ応じておらず、最低限の音楽的理解にとどまっている。実例は指し示し方が適切でなく、限定的であるか、まったくない。音楽用語の用い方は限定的であるか、まったくない。
5-8	解答は常に設問に応じているわけではないが、いくらかの音楽的理解がうかがえる。多少実例を挙げているが、指し示し方が明確でない。いくらかの音楽用語を用いている。
9-12	解答はおおむね質問に対応しており、まずまずの程度の音楽的理解がうかがえる。実例を挙げているが、指し示し方が明確でない時がある。音楽用語は部分的に効果的に用いられている。
13-16	解答はおおむね質問に対応しており、必ずしもいつも説得力があるわけではないが、良いレベルの音楽的理解がうかがえる。適切に実例を挙げており、指し示し方もほぼ明確といえる。音楽用語は大部分が効果的に用いられている。
17-20	解答は一貫して質問に対応しており、説得力があり非常に良いレベルの音楽的理解がうかがえる。最も適切なやり方で実例を挙げており、指し示し方も明確である。音楽用語は非常に効果的に用いられている。

リスニング試験 — セクション B (S L ・ H L)

A 音楽的要素

この規準では、音の長さや音程、調性、音質や音色、テクスチャ、強弱、形式などといった（しかしこれに限定されるわけではない）音楽的要素の知覚的に認識する能力を評価します。アーティキュレーションやその他の様式技法や制作技法も論じられるかもしれませんが。

注：構成は別の規準で評価します。

評点	レベルの説明
0	成果は、以下に記す基準に達していない。
1	解答に示された聴覚的認識力は不十分でほぼ認識できていない状態である。音楽的要素の認識は非常に乏しく、あるとしても特性を捉えたいくつかのみである。
2	解答に示された聴覚的認識力はまずまずの程度で、音楽的要素の認識はいくらかはある。特性を捉えたものも含まれたいくつかの要素を認識できている。
3	解答に示された聴覚的認識力は部分的に優れている。生徒は音楽的要素をおおむね正確に特定しており、それには特性を捉えた多少のものも含まれている。
4	解答に示された聴覚的認識力は大部分が優れている。生徒は音楽的要素を正確に特定しており、それには特性を捉えたものも多く含まれている。
5	解答は一貫して非常に優れた聴覚的認識力を示している。生徒は音楽的要素を正確に特定しており、それには特性を捉えたものがほとんど含まれている。

B 音楽的構成

この規準では、形式、フレーズ、モチーフなどといった（しかしこれに限定されるわけではない）主要な構成的特徴の認知能力を評価します。

評点	レベルの説明
0	解答は、以下に記す基準に達していない。
1	解答に示された内容には重要な構成的特徴を認知している様子が少ない。
2	解答に示された内容には重要な構成的特徴の認知は限定的であり、効果的でない。
3	解答に示された内容には重要な構成的特徴を部分的ではあるが効果的に認識している様子がうかがえる。
4	解答に示された内容には重要な構成的特徴をほぼ効果的に認識している様子がうかがえる。
5	解答に示された内容には重要な構成的特徴を非常に効果的に認識している様子が一貫してうかがえる。

C 音楽用語

この規準では、生徒の音楽用語とその正しい用法についての知識を評価します。

採点	レベルの説明
0	解答は、以下に記す基準に達していない。
1	解答には音楽用語についての知識と用法が示されていても、少ない。
2	解答には音楽用語についての知識がいくらか示されている。しかし、ときどきその用法が適切でない。
3	解答には音楽用語についての知識と用法が納得できる程度であるということが示されている。
4	解答には音楽用語とその用法についての良い知識をもっているということが示されている。
5	解答には音楽用語とその用法についての非常に良い知識をもっているということが一貫して示されている。

D 音楽的文脈

この規準では、曲の抜粋を文化的、歴史的、様式的などといった（しかしこれに限定されるわけではない）音楽的文脈に当てはめる生徒の能力を評価します。

採点	レベルの説明
0	解答は、以下に記す基準に達していない。
1	解答に示された音楽的文脈に関する知識は少なく、不適切である。生徒は理路整然とした議論を用いることが少なかった。
2	解答には音楽的文脈についての知識がいくらか示されている。生徒はときどき理路整然とした議論を用いることができた。
3	解答には音楽的文脈についての知識がまずまずの程度で示されている。生徒は部分的に効果的で理路整然とした議論を用いることができた。
4	解答には音楽的文脈についての良い知識をもっているということが示されている。生徒はほぼ効果的で理路整然とした議論を用いることができた。
5	解答には音楽的文脈についての良い知識をもっているということが一貫して示されている。生徒は一貫して非常に効果的で理路整然とした議論を用いることができた。

音楽的関連性研究

A 音楽文化と実例と関連性

この規準では、生徒が研究対象の例に挙げる曲の選択について評価します。生徒は、2つの特徴的で異なる音楽文化を背景にもつ曲を1曲（以上）ずつ選択します。選択するこれらの曲は、詳細な研究が可能な音楽的関連性を2つ以上共有していなければなりません。生徒は必ず、音楽学的比較研究のカバーシートと原稿の冒頭に、その2つ以上の「音楽を特徴づける要素のつながり」を提示します。

I Bディプロマプログラム音楽コースの目的としての音楽的文化の定義は、本書「シラバスの内容」のセクションを参照してください。

採点	レベルの説明
0	解答は、以下に記す基準に達していない。
1	2つの特徴的で異なる音楽文化の選択が不適切であり、そして／またはそれら2つの異なる音楽文化を背景にもつ曲には「音楽を特徴づける要素のつながり」が2つ以下しかない、そして／または選曲自体が不適切である。音楽的関連性はまったく述べられていないか、あっても曖昧である、あるいは音楽的な内容でなく、研究対象として不十分である。
2	2つの特徴的で異なる音楽文化の選択はおおむね適切で、それら2つの異なる音楽文化を背景にもつ曲から選択した曲には「音楽を特徴づける要素のつながり」が2つ以上あり、選曲はおおむね適切である。音楽的関連性はまずまずの程度で述べられており、研究が可能である。
3	2つの特徴的で異なる音楽文化の選択はたいへん適切である。2つの異なる音楽文化を背景にもつ曲から選択した曲には重大な「音楽を特徴づける要素のつながり」が2つ以上あり、選曲はたいへん適切である。音楽的関連性ははっきりと述べられており、奥深い研究が可能である。

B 音楽的要素の分析と比較

この規準では、選択した音楽において、音の長さや音程、調性、音質や音色、テクスチャ、強弱、形式、構成などといった（しかしこれに限定されるわけではない）音楽的要素とその重要性を分析、考察、比較、対比する生徒の能力を評価します。

採点	レベルの説明
0	解答は、以下に記す基準に達していない。
1	解答に示された音楽的要素についての説明は少なく、そして／または不正確である。選択した音楽の比較や対比も少ない。
2	研究には音楽的要素について、部分的に納得できる程度の説明と分析が示されている。解答には選択した音楽についていくらかの比較や対比が示されている。研究には、重大な不正確な内容が含まれている場合も見られる。
3	研究には音楽的要素について、ほとんどの場合効果的な説明と分析が示されている。解答には選択した音楽について納得できる程度の比較や対比が示されている。研究は、ほとんど正確である。
4	研究には音楽的要素について、ほとんどの場合効果的な説明と分析が示されている。解答には選択した音楽についてなかなか良い比較や対比が示されている。研究は、ほとんど正確である。
5	研究には音楽的要素について、効果的な説明と分析が示されている。解答には選択した音楽について良い比較や対比が示されている。研究は正確である。
6	研究には音楽的要素について、一貫して非常に効果的な説明と分析が示されている。解答には選択した音楽について、うまく焦点を合わせた比較や対比が示されている。研究は正確である。

C 音楽用語

この規準では、生徒の音楽用語とその正しい用法についての知識を評価します。

採点	レベルの説明
0	解答は、以下に記す基準に達していない。
1	解答には音楽用語についての知識と用法が示されていても、少ない。
2	解答には音楽用語についての知識がいくらか示されている。しかし、ときどきその用法が適切でなかった。
3	解答には音楽用語とその用法についての良い知識をもっているということがほとんどの場合示されている。
4	解答には音楽用語とその用法についての非常に良い知識をもっているということが一貫して示されている。

D 研究資料のまとめと提示方法

この規準では、選択したメディア形式の中の素材、参考資料、引用、参考文献目録、ディスコグラフィーをまとめ、提示する能力を評価するもので、出典の使用についても評価されます。

注：一次資料（直接的資料）の利用は必須。

採点	レベルの説明
0	研究資料のまとめと活用は、以下に記す基準に達していない。
1	研究資料のまとめと活用はおおむね不適切になされている。使用されている一次資料（あれば二次資料も）は不適切で、出典が正しく示されていない。
2	研究資料のまとめと活用はおおむね適切になされている。使用されている一次資料（あれば二次資料も）は適切で、出典はすべて適切に正しく示されている。
3	研究資料のまとめと活用は適切になされている。使用されている一次資料（あれば二次資料も）は適切で、出典はすべて正しく示されている。

E 全体印象

この規準では、知的で意欲的な取り組み、理解度、創造性、受け手に対する表現力などを評価します。

採点	レベルの説明
0	研究成果は、以下に記す基準に達していない。
1	研究成果に見られる上述の品質の証拠 ^{エビデンス} は少ない。
2	研究成果には上述の品質の証拠 ^{エビデンス} がいくらか見られる。
3	研究成果には上述の品質の良い証拠 ^{エビデンス} が見られる。
4	研究成果には一貫して上述の品質の良い証拠 ^{エビデンス} がよく見られる。

内部評価

内部評価の目的

内部評価は、音楽コースでは不可欠な要素であり、SLとHL両方の生徒にとって必須です。内部評価では、筆記試験のような時間的制限やその他の制約に左右されることなくスキルや知識の活用を示したり、個人的関心を追及したりすることができます。内部評価は、できる限り通常の授業に織り込まれるべきであり、履修期間の終了後に別途に実施されるべきではありません。

内部評価の要件は、SLとHLでは異なります。SLの生徒は創作、ソロ演奏、グループ演奏の3つの選択肢から**1つ**を選択するのに対し、HLの生徒は創作とソロ演奏の**両方**を発表しなくてはなりません。さらに、HLの生徒はこれら2つの要素それぞれについて、この他にも課題の提出が求められます。

指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

SLとHL両方において、内部評価課題は生徒本人が取り組んだものであることが必須です。しかしこれは、生徒自身がタイトルやトピックを決め、教師からの支援を一切受けずに、独自に内部評価課題に取り組まなければならないということではありません。教師は、生徒が内部評価課題を計画する段階と取り組む段階で重要な役割を果たします。教師は、責任をもって、以下の項目を生徒にしっかりと理解させるようにしてください。

- ・ 内部評価の対象となる課題についての要件
- ・ 評価規準 — 評価課題を通じて、生徒は与えられた評価規準に効果的に取り組むべきであること

教師と生徒は内部評価課題について話し合わなければなりません。生徒がアドバイスや情報を得るために率先して教師と話し合うよう促してください。また、生徒が指導を求めたことで減点してはなりません。ただし、生徒が教師からの相当量のサポートなしに課題を完成させることができなかつた場合は、その旨をIB資料『DP手順ハンドブック』にある所定のフォームに記載してください。

生徒全員が学問的誠実性に関する概念、特に学習成果物が本当に生徒本人が取り組んだものであること、および知的所有権についての基本的な意味と重要性を理解していることを確認するのは教師の責任です。教師は必ず、すべての評価課題が要件に沿って取り組まれていることを確認しなければなりません。また、内部評価課題が完全に生徒自身によるものでなければならないことを生徒に対して明確に説明しなければなりません。

教師は学習過程の一部として、内部評価課題の初稿や最初の演奏について、生徒に助言を与えるべきです。教師は、改善する方法を口答または文書で助言することはできますが、初稿を編集したり、多くの注釈をつけるといったことをしてはなりません。演奏課題の場合も過度なフィードバックであってはなりません。この初稿や最初の演奏の次に教師に提出される課題が最終稿／最終成果物となります。

モデレーションや評価のために I B に提出されるすべての学習成果物は教師により認証されたものでなければなりません。また学問的不正行為の疑いがあるものや、不正行為が確認されたいかなる成果物も提出してはなりません。各生徒は学習成果物が自分自身のものであること、またそれが最終版であることを確かめ、内部評価課題のカバーシートに署名をします。なお、内部評価課題の最終版を正式に教師（もしくはコーディネーター）に提出した後は、これを撤回することはできません。学習成果物が生徒本人が取り組んだものであることの確認要件は、モデレーション目的で I B に提出されるサンプル作品だけでなく、すべての生徒の作品に適用されます。

生徒本人が取り組んだものであるかどうかは、生徒と課題の内容について話をするのと、そして次のうち 1 点以上を精査することで確認します。

- ・ 生徒の最初の提案
- ・ 最初の草稿／演奏
- ・ 生徒自身によるものであることが確認されている他の課題／演奏とのスタイルの比較

内部評価用に提出するカバーシートへの教師と生徒の署名は、I B 試験官によるモデレーション（評価の適正化）のために提出されるサンプル課題だけではなく、すべての生徒の作品に適用されます。教師と生徒がカバーシートに署名をした場合でも、その成果物が生徒本人によるものでない可能性がある趣旨のコメントがある場合には、生徒はその課題の評価を受ける資格を失います。この問題についてのさらに詳しい案内については、I B 資料『学問的誠実性』、『一般規則：ディプロマプログラム』の関係項目を参照してください。

教科における評価課題と課題論文（E E）に同じ成果物を提出することはできません。

リスニング試験の課題曲を演奏（ソロ／グループ）の課題曲に含むことはできません。HL の生徒は創作と演奏課題の両方に自分が創作した課題を提出することもできません。生徒が創作課題を演奏課題で提出すると決めた場合、創作課題の一部としてその作品を提出することができません。

詳細については、I B 資料『DP 手順ハンドブック』を参照してください。

グループワーク

ソロ演奏とグループ演奏の共同作業についての詳細は、本資料の「内部評価の詳細 — SL/HL」を参照してください。

時間配分

内部評価は、音楽コースの不可欠な要素であり、S LおよびH Lのコースでは最終評価の50%に相当します。この配点比率を踏まえて、課題に取り組むのに必要な知識、スキル、理解の指導に当てる時間、および課題を進めるために必要な時間を配分する必要があります。

課題に割り当てられるべき推奨時間は、S Lの場合は合計約75時間、H Lは150時間（2要素、各75時間）を割りあてることが推奨されています。この時間には以下を含めるようにしてください。

- ・ 教師が生徒に内部評価の要件を説明する時間
- ・ 授業中に生徒が内部評価の構成要素に取り組み、質問をする時間
- ・ 教師と各生徒が話し合う時間
- ・ 課題に目を通し、進行状況を確認する時間、および生徒本人が取り組んだ課題であるかどうかをチェックする時間

要件および奨励事項

モデレーション（評価の適正化）での整合性をとるため、教師による内部評価はモデレーターが使用するものと同じ証拠（録音、文書など）に基づき行うことが重要です。

録音はすべてコンパクトディスク（CD）、または各学校に通知されるIB指定のデジタル形式で提出します。

教師は、その作品を、録音した機材以外の音楽機材でも聴くことができることを確認してから提出してください。ケースと添付文書には必ず学校名と生徒の名前を明記して下さい。また、教師は必ず音質も良好であることを確認してから提出してください。

内部評価への評価規準の適用

内部評価には、多くの評価規準が設けられています。各評価規準には、学習成果物が特定のレベルに到達している場合にその成果物に見られる特徴を記述した「レベルの説明」と、それに対応する点数が明示されています。「レベルの説明」では、基本的には肯定的側面に焦点を当てていますが、下位の到達レベルでは、達成できなかった点を判断基準とする場合もあります。

教師がS LおよびH Lの内部評価課題を採点する際は、評価規準の「レベルの説明」に照らし合わせて判断しなければなりません。

- ・ 評価規準はS L、H L共通です。
- ・ ベストフィット（適合）モデルの考え方に基づき、「レベルの説明」から、生徒の到達レベルを最も適切に示す記述を見つけます。学習成果物に見られる到達度が規準に示されている要素によって異なる場合、補正するというのがベストフィット（適

合) アプローチの考え方です。与えられる点数は、規準に照らし合わせた場合に、レベルのバランスを最も公正に反映するものでなければなりません。「レベルの説明」に挙げられている要素をすべて満たさなければ、その点数が得られないということではありません。

- ・ 生徒の成果物を評価する際、教師は、評価規準で成果物のレベルを最も的確に示している説明と一致するまで、各レベルの説明を読まなければなりません。成果物が2つの説明のちょうど中間にあたと見られる場合、両方の説明を読み直し、生徒の成果物をより適切に示す方を選ばなければなりません。
- ・ 1つのレベルに複数の評点が割り当てられている場合、生徒の成果物について、説明内容を達成している度合いが大きければ高い方の評点をつけます。説明内容を達成している度合いが小さければ低い方の評点をつけます。
- ・ 整数のみを用います。分数や小数を用いた点数は認められません。
- ・ 教師は合格・不合格の線引きをするような考え方をせずに、各評価規準において、学習成果物を最も適切に表すレベルを判別することに専念しなければなりません。
- ・ 「レベルの説明」にある最上位レベルは、欠点のない完璧な学習成果を意味するものではなく、生徒が到達しうるレベルであるべきです。成果物がその説明内容にあてはまるのであれば、教師は最高点や最低点をつけることを躊躇してはなりません。
- ・ 1つの規準において到達レベルの高かった生徒が、他の規準においても到達レベルが高いとは限りません。同様に、1つの規準において到達レベルの低かった生徒が、他の規準においても到達レベルが低いとは限りません。教師は、生徒の全体的な評価からある特定の点数をその生徒の得点として想定するべきではありません。
- ・ 生徒が評価規準を参照できるようにしておくことが強く奨励されています。

内部評価の詳細 — S L ・ H L

創作 — S L C ・ H L

配点比率：S L C — 50%、H L — 25%

本コースでI Bが推奨する授業時間数は、S L、H Lともに75時間です。

創作には5つの選択肢が設けられています。生徒はこの要素の要件を満たす組み合わせを選択します。S Lの生徒は課題の創作作品を**2曲**、H Lは**3曲**提出します。(組み合わせの選択に関する詳細は、本書「シラバスの内容」にある「創作オプション」の表を参照してください。) 課題作品は必ず教師の指導監督のもと行われます。生徒と教師は、最終的な評価の対象は生徒独自の作品でなくてはならないことを念頭においてください。

最終提出課題(録音、譜面、振り返りの記述)には、生徒の氏名、セッション番号、正しい作品のタイトルを記したヘッダーをつけてください。

作曲、音楽テクノロジーを用いた作曲、編曲、即興演奏

制限時間を超える作品は、各曲の冒頭6分で評価されます。判断が難しい場合は、制限時間の区切りについて教師と試験官が判断するものとします。

様式技法— b、f

b バッハのコラールの評価対象は、コラール**1曲のみ**です。

f 19世紀の歌曲の伴奏の評価対象は、歌曲**1曲のみ**です。

判断が難しい場合は、教師と試験官が元の作曲家の曲を確認するものとします。

様式技法— a、c、d、e、g

以下の技法の評価は、**冒頭の24小節**を使います。

- a. ルネサンスの声楽的対位法
- c. バロック様式の通奏低音奏法
- d. 18世紀の2声の器乐的対位法
- e. 18世紀の弦楽四重奏
- g. 十二音技法

判断が難しい場合は、教師と試験官が小節制限の区切りについて判断するものとします。

生徒の創作課題作品は教師が内部評価し、外部でIBがモデレーション（評価の適正化）を行います。この項目を指導する教師が2名以上いる場合は、校内で標準化させる必要があります。規準は、SL、HL両方の生徒の創作課題に対し同等に適用する必要があります。

振り返り（リフレクション）

さらに、作品それぞれについて振り返りの記述を書くことがすべての生徒に義務づけられています。

振り返りの記述は、それぞれ300語（日本語の場合は600字）以内にまとめてください。指定文字数を超える場合は、初めの300語（日本語の場合は600字）で評価します。判断が難しい場合は、語数（字数）制限の区切りについて教師と試験官が判断するものとします。

記述は、時間をかけて創作のプロセスを振り返るものでなくてはなりません。振り返りの記述には、以下に関する生徒の文書が必ず含まれるものとします。

- ・ **意図**— 一曲の背後にある表現意図は何でしたか。
- ・ **過程**— その曲を仕上げるために、生徒はどのような段階を踏みましたか。
 - 音楽的要素をどのように展開させるよう工夫しましたか。

- 音楽的要素のはたらきを変化させる上でどのような成功や困難に直面しましたか。
- (あれば) どのような機材を使用しましたか。(音楽テクノロジーによる作曲の場合は、サンプリングやインポートをした素材の名前と入手先を記載してください。)
- ・ **結果**—その曲を創作することで、音楽的に何を学びましたか。

ソロ演奏—SLS・HL

配点比率：SL—50%、HL—25%

本コースでIBが推奨する授業時間数は、SL、HLともに75時間です。

生徒は、1度以上の公开发表で収録した曲の録音を提出しなければなりません。録音が生徒自身のものであることが確かめられるよう、教師は生徒の演奏に立ち会うことが推奨されています。

演奏時間の合計は以下のとおりです。

- ・ SL—15分
- ・ HL—20分

楽曲の事情を考慮し、提出曲は規定よりも1分(SL)と2分(HL)までは長くても短くても許容しています。

SLおよびHLのソロ演奏の提出課題には、以下を含めることが可能です。

- ・ 小グループの演奏者として1曲(5分以内)

生徒の演奏箇所は、他声部と同旋律と重なることは最小限に抑えられなければならない、明確に聞き分けられるものでなくてはなりません。また、曲の大半部分を占めるものとします。

ソロ演奏に音楽テクノロジーを選択する生徒は、小グループの曲は提出**できません**。

生徒は、どのような音楽様式で演奏しても構いません。どんな楽器でも声でも使用できます。(奏者は1つ以上の楽器を演奏しても構いません。)ソロ演奏者の伴奏は、一般的な演奏上の慣習に従ったものにしてください。さらに生徒は、楽器/声**または**音楽テクノロジーのいずれかを使って**必ず**自分のソロ演奏を発表しなくてはなりません。これらを組み合わせることは**できません**。

また、演奏では伴奏者として複数の演奏者が必要な場合があります。例えばジャズサクソ奏者はピアノ、ギター、ベース、ドラムと一緒に演奏をするのが慣例です。また、ロックバンドの歌手であればエレキギター、ベースギター、ドラムがバックキングにつくことがあります。

生徒が自身の伴奏をする場合は、必ず評価を受けるソロパートをカバーシートに明記してください。例えば、歌い手として自分の伴奏するギターに合わせて歌うなら、おそらくソロパートは歌の方でしょう。

このコースは、1度以上の公演を目指して組み立てる必要があります。生徒は、履修中に達成した実績を表す対照的な曲を、その中から選択します。教師のサポートや助言は受けることができますが、最終的に提出課題の録音を選択するのは生徒です。

制限時間を超える場合、評価の対象は曲の冒頭から以下の時間までです。

- ・ S Lは15分 (16分)
- ・ H Lは20分 (22分)

判断が難しい場合は、指定時間の区切りについて教師と試験官が判断するものとします。

生徒のソロ演奏は教師が内部評価し、外部でI Bがモデレーション（評価の適正化）を行います。この項目を指導する教師が2名以上いる場合は、校内で標準化させる必要があります。規準は、S L、H L両方の生徒の演奏課題に対し同等に適用する必要があります。

グループ演奏研究 — S L G

配点比率：50%

コースでI Bが推奨する授業時間は、S L、H Lともに75時間です。

生徒はどの音楽グループで演奏活動をして構いませんが、評価を受ける音楽グループは選ばなくてはなりません。例えば、2つのグループで演奏するベースギタリストは、提出用にどちらか1つを選ぶ必要があります。

最終録音の提出課題のみが評価の対象となります。これ以外の要素は考慮されません。

提出課題の条件は以下の通りです。

- ・ 演奏時間は合計で20～30分

制限時間を超える場合、評価の対象は冒頭から30分です。判断が難しい場合は、指定時間の区切りについて教師と試験官が判断するものとします。

このコースは、2度以上の演奏の機会を目指して組み立てる必要があります。録音が生徒自身のものであることが確かめられるよう、教師は生徒の演奏に立ち会うことが推奨されています。

このグループ演奏を選択する生徒と相談のうえ、教師が評価対象曲の最終的な選択を行います。2回以上の演奏から対照的な作品を少なくとも2曲選びます。グループがコースの期間中に達成した最高のパフォーマンスを反映できる選択にしてください。

生徒の創作物は教師が内部評価し、外部でI Bがモデレーション（評価の適正化）を行います。この項目を指導する教師が2人以上いる場合は、校内で標準化させる必要があります。

注：グループ演奏のメンバーには全員、同じ評点が付与されます。

内部評価基準—S L・H L

創作（S L C・H L）

創作の学習を選択する生徒には、5つの選択肢が用意されています。各選択肢は6つの規準（A～F）で評価されます。

選択 規準	作曲	音楽 テクノロジー を用いた作曲	編曲	即興演奏	様式技法
A	音楽的要素の工夫と展開	音楽的要素の工夫と展開	音楽的要素の工夫と展開	音楽的要素の工夫と展開	音楽的要素の工夫と展開
B	音楽的秩序	音楽的秩序	音楽的秩序	音楽的秩序	音楽的秩序
C	声や楽器の特質に対する理解	声や楽器の特質に対する理解	声や楽器の特質に対する理解	声や楽器の特質に対する理解	声や楽器の特質に対する理解
D	記譜法	音質	記譜法	自発性	記譜法
E	印象	印象	印象	印象	印象
F	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り

A 音楽的要素の工夫と展開

作曲、音楽テクノロジーを用いた作曲、編曲、即興演奏、様式技法

音の長さや長さ、調性、音色、テクスチュア、強弱などといった（しかしこれに限定されるわけではない）、選択した音楽的要素の探究、コントロール、展開を評価します。

注：形式と構成は別の規準で評価します。

評点	レベルの説明
0	提出作品は、以下に記す基準に達していない。
1	提出作品に見られる、音楽的要素の工夫は少ない。
2	提出作品には、音楽的要素の工夫や展開がいくらか見られる。
3	成果物提出作品には、音楽的要素の工夫が納得できるレベルで見られ、一部効果的に展開されている。
4	提出作品は、音楽的要素の工夫がよく示されており、ほとんどの場合効果的に展開されている。
5	提出作品は、音楽的要素の工夫が一貫してうまく焦点を合わせた形で示されており非常に効果的に展開されている。

B 音楽的秩序

作曲、音楽テクノロジーを用いた作曲、編曲、即興演奏、様式技法

この規準では、素材の構成を同一性のある形式、構成、様式にすることでその作品に音楽的秩序をもたせているかを評価します。

評点	レベルの説明
0	提出作品は、以下に記す基準に達していない。
1	提出作品に見られる音楽的な秩序は少ない。
2	提出作品に音楽的な秩序がいくらか見られる。
3	提出作品に音楽的な秩序が部分的に効果的に見られる。
4	提出作品に音楽的な秩序がほとんどの場合効果的に見られる。
5	提出作品に常に音楽的な秩序が非常に効果的に見られる。

C 声や楽器の特質に対する理解

作曲、音楽テクノロジーを用いた作曲、編曲、即興演奏、様式技法

この規準は、作品の中に表れる生徒の選んだ声や楽器の技術的特質（や限界）の理解度を評価します。

適切な例としては、ソプラノ、アルト、テナー、バス（SATB）のための四重唱などが挙げられます。四重唱は正しい声域や声区を用い、声部間で微妙な調和や混和をとっています。不適切な例としては、大編成ブラスバンドとピアノシモで奏するハープのための作品などが挙げられるでしょう。

音楽テクノロジーの場合の適切な例としては、ソフトウェアやハードウェアの機能を完全に理解し、適切に使いこなしていることがうかがえる作品などです。不適切な例としては、ソフトウェアやハードウェアの機能を一部しか使っていない作品などです。

即興の場合、この規準では、生徒の選んだ声や楽器の表現効果の理解を示す演奏能力を評価します。適当な例としては、アーティキュレーションのなめらかさが表れた作品などが挙げられます。

評点	レベルの説明
0	提出作品は、以下に記す基準に達していない。
1	提出作品に見られる声や楽器の技術的特質（や限界）への理解は少ない。
2	提出作品に声や楽器の技術的特質（や限界）への理解がいくらか見られる。
3	提出作品に声や楽器の技術的特質（や限界）への理解が納得いくようなレベルで見られる。
4	提出作品に声や楽器の技術的特質（や限界）への良い理解が見られる。
5	提出作品に声や楽器の技術的特質（や限界）への非常に良い理解が一貫して見られる。

D 記譜法

作曲、編曲、様式技法

この規準では、作曲、編曲や作曲家の様式を研究する際の生徒の記譜能力を評価します。記譜法は様式によって異なることはありますが、正しく記譜された作品は作曲者の意図を表現できます。

評点	レベルの説明
0	提出作品は、以下に記す基準に達していない。
1	記譜法は不正確で、作曲者の意図をほとんど表現できていない。
2	記譜法は正確なところもあるが、作曲者の意図が一部しか表現されていない。
3	記譜法はおおむね正確で、作曲者の意図が部分的に効果的に表現されている。
4	記譜法はおおむね正確で、作曲者の意図がほとんどの場合効果的に表現されている。
5	記譜法は終始、正確で、作曲者の意図が非常に効果的に表現されている。

D 音質

音楽テクノロジーを用いた作曲

この規準では、提出されたCDのアナログ音とデジタル音の制御操作を評価します。

評点	レベルの説明
0	提出作品は、以下に記す基準に達していない。
1	音質が悪く、信号レベルが不適切で、バランスが悪い。イコライジングやエフェクトの使い方が悪く、録音処理の過程への理解が少ない。
2	音質はまずまずな時もあるが、信号レベルが不適切で、バランス調整の試みがほとんどは限定的にしか反映されていない。イコライジングやエフェクトの使用が不均一で、録音処理の過程への理解が部分的である。
3	音質はまずまず、信号レベルもほぼ適切で、バランス調整の試みが反映されている。イコライジングや他の録音効果の使用はまずまずで、録音処理の過程について効果的に理解している様子が部分的にうかがえる。
4	音質は良い、信号レベルも適切で、バランスもとれている。イコライジングや他の録音効果をおおむね上手く使用し作品の質を高め、録音処理の過程についてほとんどの場合効果的に理解している様子がうかがえる。
5	音質は一貫して非常に良く、信号レベルも適切で、バランスもとれている。イコライジングや他の録音効果を一貫して上手く使用し作品の質を高め、録音処理の過程について非常に効果的に理解している様子がうかがえる。

D 即興性

即興演奏

この規準では、即興演奏における即興性と音楽的表現を評価します。リスクをいとわな
い多様かつ創意工夫に富んだ音楽的発想を組み合わせる能力がこれに関連します。

評点	レベルの説明
0	提出作品は、以下に記す基準に達していない。
1	録音された即興演奏に見られる、自発性や音楽的表現は少ない。
2	録音された即興演奏には、自発性や音楽的表現がいくらか見られる。
3	録音された即興演奏には、自発性や音楽的表現が部分的に効果的な形で見られる。
4	記録された即興演奏には、自発性や音楽的表現がほとんどの場合効果的な形で見られる。
5	記録された即興演奏には、一貫して、自発性や音楽的表現が非常に効果的な形で見られる。

E 印象

作曲、音楽テクノロジーを用いた作曲、編曲、即興演奏、様式技法

この規準では、創造性、意欲的な取り組み、表現意図を持った創作を評価します。

評点	レベルの説明
0	提出作品は、以下に記す基準に達していない。
1	作品に示されている創造性、全体像や方向性は少なく、表現意図や意欲的な取り組みも少ない。
2	作品には創造性、全体像や方向性がいくらか見られる。表現意図や意欲的な取り組みがいくらか感じられる。
3	作品には創造性があり、全体像や方向性も納得できるレベルである。まずまずのレベルの表現意図や意欲的な取り組みが感じられる。
4	作品には創造性があり、全体像や方向性もよい。表現意図や意欲的な取り組みがよく感じられる。
5	作品からは一貫して創造性や魅力が伝わり、全体像や方向性もたいへんよい。表現意図や意欲的な取り組みがはっきりと感じられる。

F 振り返り（リフレクション）

作曲、音楽テクノロジーを用いた作曲、編曲、即興演奏、様式技法

この規準では、作品の表現意図、創作過程、成果を文書形式で振り返る能力を評価します。

評点	レベルの説明
0	振り返りの記述は、以下に記す基準に達していない。
1	振り返りの記述に反映されている作品に対する生徒の意図、創作過程、成果に対する理解は少ない。
2	振り返りの記述には、作品に対する生徒の意図、創作過程、成果に対する理解がいくらか反映されている。
3	振り返りの記述には、作品に対する生徒の意図、創作過程、成果に対する効果的な理解が部分的に反映されている。
4	振り返りの記述には、作品に対する生徒の意図、創作過程、成果に対する効果的な理解がほとんどの場合反映されている。
5	振り返りの記述には、作品に対する生徒の意図、創作過程、成果に対する非常に効果的な理解が一貫して反映されている。

ソロ演奏（SLS・HL）、グループ演奏（SLG）

A プログラムの選択

この規準では、生徒やグループが達成した実績を表す対照的な曲が選択できているか、伴奏の要件を満たしているかを評価します。

評点	レベルの説明
0	選択曲は、以下に記す基準に達していない。
1	あまり対照的な曲が選ばれておらず、生徒やグループの達成可能な演奏能力を表現するには適切ではない。 伴奏のガイドラインにしたがっていない。
2	いくらか対照的な曲が選ばれてはいるものの、ところどころ生徒やグループの達成可能な演奏能力の範囲を超えている。 伴奏のガイドラインにしたがっている。
3	ほとんどの場合良い対照的な曲が選択されており、生徒やグループの達成可能な演奏能力に適切である。 伴奏のガイドラインにしたがっている。
4	一貫して大変良い対照的な曲が選択されており、生徒やグループの達成可能な演奏能力に非常によく合っている。 伴奏のガイドラインにしたがっている。

B 技術的習熟度

この規準では、選択された演奏における適切かつ一貫性のあるテクニックによる演奏の中で、音の長さや音程、調性、音質や音色、テクスチュア、強弱、形式、構成などといった（しかしこれに限定されるわけではない）音楽的要素のコントロールができていないかを評価します。

評点	レベルの説明
0	演奏は、以下に記す基準に達していない。
1	作品の中で操ることのできている音楽的要素は少ない。技術的課題に対処できているところはほぼない。
2	作品の中で音楽的要素はいくらか操ることができている。技術的課題にいくらか対処できている。
3	作品の中で音楽的要素は部分的に操ることができている。ほとんどの技術的課題に対処できている。
4	作品の中で音楽的要素はほとんど効果的に操ることができている。ほとんどの技術的課題に対処できている。
5	作品の中で音楽的要素は一貫して効果的に操ることができている。技術的課題に対処できている。
6	作品の中で音楽的要素は一貫して非常に効果的に操ることができている。技術的課題には一貫して対処できている。

C 様式の理解

この規準では、生徒や生徒たちのグループの各楽曲の様式的特徴への理解度を、選択されたプレゼンテーションから評価します。

評点	レベルの説明
0	以下に記す基準に達していない。
1	選択されたプレゼンテーションからは様式的特徴の理解が少ないことが感じられる。
2	選択されたプレゼンテーションからは様式的特徴の理解がいくらかはあることが感じられる。
3	選択されたプレゼンテーションからは様式的特徴の理解がほぼあることが感じられる。
4	選択されたプレゼンテーションからは様式的特徴の理解が終始、確実になされていることが感じられる。

D 表現意図

この規準では、どの程度、生徒やグループが音楽作品の再現にあたり表現したい意図をもって受け手に伝えられているかを評価します。

評点	レベルの説明
0	演奏は、以下に記す基準に達していない。
1	演奏上の表現意図は表れているが少ない。
2	演奏上の表現意図はいくらかは表れている。
3	演奏上の表現意図は部分的に効果的に表れている。
4	演奏上の表現意図はほぼ効果的に表れている。
5	演奏上の表現意図は終始効果的に表れている。
6	演奏上の表現意図は終始非常に効果的に表れている。

指示用語の解説

指示用語の定義

生徒は、試験問題で使用される次の重要な指示用語および表現に慣れておく必要があります。指示用語は以下の定義に基づいて理解されなければなりません。これらの用語は試験問題に頻出しますが、それ以外の用語を用いて、生徒に特定の方法で議論を展開するよう指示する場合もあります。

分析せよ Analyse	本質的な要素または構造を明らかにするために分解しなさい。
比較せよ Compare	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点および相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
比較し、対比せよ Compare and contrast	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点および相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
対比せよ Contrast	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
定義せよ Define	単語、フレーズ、概念、または、物理的な量で、正確な意味を述べなさい。
論証せよ Demonstrate	実例や実際の応用を挙げながら、推論または根拠に基づき明らかにしなさい。
詳しく述べよ Describe	詳細に記述しなさい。
論ぜよ Discuss	さまざまな議論、要因、仮説を考慮し、バランスよく批評しなさい。意見または結論は、適切な根拠を挙げて、はっきりと述べなさい。
区別せよ Distinguish	2つ以上の概念または項目を明確に区別しなさい。
評価せよ Evaluate	長所と短所を比較し、価値を定めなさい。

考察せよ Examine	論点の前提や相互関係が明らかになるように、議論または概念について考えなさい。
説明せよ Explain	理由または原因を含めて詳しく記述しなさい。
探究せよ Explore	何かを発見するための系統立ったプロセスに取り組みなさい。
公式化せよ Formulate	関係のある概念または議論を正確に系統立てて表現しなさい。
特定せよ Identify	多くの可能性の中から答えを出しなさい。
調査せよ Investigate	事実を立証し、新しい結論に到達するため、観察、検討、詳細かつ体系的な調査を行いなさい。
正当化せよ Justify	答えや結論を裏付ける理由と証拠を提供しなさい。
概要を述べよ Outline	簡潔な説明または要点を述べなさい。

教師参考資料

生徒による音楽作品の録音されたサンプルはOCC上の下記のリンクでお聞きいただけます。

http://xmltwo.ibo.org/publications/DP/Group6/d_6_music_tsm_0909_1/html/production-app3.ibo.org/publication/179/part/2/chapter/2/page/1.1.html

生徒による音楽作品のサンプルには次のセクションのものが含まれています。

- ・ 創作（生徒の作曲作品の譜面）
- ・ 振り返りの記述（英語で書かれたもの）
- ・ ソロ演奏（音楽録音）
- ・ グループ演奏（音楽録音）
- ・ 音楽学的比較研究（英語で書かれたもの）

生徒の作曲作品、録音作品の例は英語の教師参考資料（TSM）を参照して下さい。